

鶴彬の絵本出版



絵本「鶴彬の生涯」の表紙

高松海岸でよく見かけるカモメ。海と空の青さに染まらずに白く羽ばたく一羽の鳥は、まさに鶴彬の人生を象徴するかのようであり、この写真が表紙に選ばれました。



絵本「鶴彬の生涯」原画展

製本に先立ち、平成27年12月16日～26日、たかまつまちかど交流館ロビーで絵本原画展がありました。新聞や市の広報誌で紹介されたこともあり、たくさんの方が訪れました。色鮮やかに描かれたパステルの原画はA4の大きさで、21の場面で構成。文の中には鶴彬の川柳33句が紹介されています。絵本には鶴彬の年表とアルバムも追加されました。

県、市の文化事業支援の補助を受けて 石川県内の学校・図書館に贈呈

鶴彬を顕彰する会では新年度事業の第一弾として、絵本「鶴彬の生涯」を出版しました。幼くして父母と別れ、恵まれない家庭に育ちながらも、抜群の成績で級長を務めた小学校時代、川柳に目覚め新聞や機関誌に投稿を続けた少年期、恵まれない人々に寄り添い、軍隊でも抵抗を続けた青年期、そして川柳作品が反国家的だとして警察に捕らえられ29歳で獄死するという

波乱に満ちた生涯を、現代の子どもたちにも知ってもらおうと、分かりやすい絵と文で描いています。この事業は県と市の文化事業支援の対象に選ばれ、公的補助が下りたため、4月、県内の学校と図書館に無料配布されました。今後、紙芝居としても活用され、ネットでも公開予定です。

29年の波乱の生涯 素朴な絵と文で描く

顕彰会幹事 寺内徹乗・制作

鶴彬通信

はばたき

第28号

2017年5月8日

鶴彬を顕彰する会

もくじ

- ②～⑫面 寺内論考「西田幾多郎の知られざる闇」反響
- ⑬～⑭面 鶴彬のリアリズム川柳 鶴彬論文から抜粋
- ⑯～⑱面 岩原茂明著「鶴彬つ子」第二話
- ⑳～㉔面 宇部功氏・盛岡での講演・特別授業感想文

『西田幾多郎の知られざる闇』

反響ぞくぞく

はばたき27号に掲載した、寺内徹乗さんの論文「西田幾多郎の知られざる闇」について、たくさんの感想がよせられました。手紙や送金の振替用紙の通信欄に、また、メールやFAX、口頭、電話で、共感、疑問、批判などそれぞれ思いが述べられていました。

これらを元にさらに議論が深まることを願っています。次号以降も反響を掲載していきますので、どしどしご意見をお寄せください。なお、お名前を伏せたい方はその旨お書き添えください。（「はばたき」編集担当）

西田の“反省”が印象的

はばたき27号拝受しました。「二つの巨塔」興味深く読ませていただきました。西田哲学をわかりやすく書いていましたが、一般の人にはわかりにくいところもあると思います。しかし、くわしく読むと内容からだんだんわかっていただけだと思います。西田自ら「やはり全体主義というものはだめのもので存じまず」が印象的でした。

「戦争」をテーマにして、まだまだわからないことがたくさんあります。しかし戦争の

失敗を繰り返さないことは、しつかり認識し、語り伝える必要があります。今がぎりぎりのところになっていきます。今行動することが大切です。その意味でも鶴彬の句を通して「平和」を伝えることだと思えます。二人を比較して、比較文学の手法で、寺内さんよくまとめましたね。大きな拍手を送りたいです。

岩手でも「啄木と賢治」や「原敬と田中正造」等よくあります。高村光太郎等も鶴彬と同じ時代に生きた人なので、これからさらに研究を深めることも大切なことです。いずれ、あの時代、何が真実なのかを疑うことさえできなかつたことを思うと、本当に恐ろしい時代と考えさせられます。子どもたちの授業の感想もありがとうございました。子どもたちのこのころに「平和」を考えるきっかけになってくれたと思います。「鶴彬通信 はばたき」が果たす役割はこれからさらに大きくなると思います。（後略）

|| 岩手県・宇部功さん

目から鱗が落ちた

西田幾多郎については、郷土石川県の偉い哲学者と思つて幾度か関心を持ったが、「解りにくいな」で止まっていた。この寺内論文を読み、目から鱗が落ち、私の今までの“うわつら”の理解による先入観だったと強く感じ反省しています。

驚き、強く感じたこと・内容は沢山ありますが、そのうちの二・三にふれます。

ア. 西田の教え子だった近衛文麿

太平洋戦争の土台を作ったのは近衛文麿である。近衛の責任と、そのバックボーン

となった哲学者たちの責任は重い。その哲学者たちの中心に西田がいた。

イ. 西田の家に陸軍幹部が出入りし、軍との関係を持っていた。

ウ. そして今日現在、かほく市の西田哲学館では、西田の都合が悪いことを「隠し」、かほく市は間違いだらけの漫画を発行するなど多額の税金を使っている。

このことは一般市民、とくに子供達に影響が大きいと考えられ、大きな問題である、と私は思う。

|| 中能登町・松田信吾さん

仲間にも勧めたい

はばたき27号の「二つの巨塔」、たいへん勉強になりました。仲間にも読んでもらいたいと思います。10部ほど送って下さい。

|| 東京・佐々木有美さん

衝撃的な内容でした。

|| 金沢・40代女性

大変、読み応えあつた

西田幾多郎批判は大変読み応えがありました。感謝です。

|| 大阪・福村清英さん

はばたき27号拝受しました。寺内論文、とても勉強になりました。

|| 東京・前田朗さん

はばたき27号に感動しました。

|| かほく市 井口武久さん

観念論から転じた柳田謙十郎氏

「鶴彬通信 はばたき」27号で、共に著名な、文化勲章受章の哲学者・西田幾多郎と反戦詩人・鶴彬が同じ石川県かほく市生まれであることを知った。哲学者西田幾多郎氏は、あのアジア・太平洋戦争で日本を滅亡への戦争に導いていった近衛文麿首相など日本を侵略戦争に駆り立てた多くの人物を育てた。

戦後の日本の労働運動や平和運動・民主的運動で大きな役割を果たされた同じ哲学者の柳田謙十郎氏は戦前は西田哲学の信奉者として多くの著書論文を書き、座談会などで観念論の代表者として活躍されていた。その柳田氏が、一九五一年九月の「わが思想の遍歴」を発表して、西田哲学を自己批判し、マルクスの弁証法的唯物論に転じたことを宣言された。これは当時のセンセーショナルな出来事であった。柳田氏にこの思想の大変革をさせた原因はなんであったのか。それは、西田哲学は、日本民族が当面している諸問題の解決のためにはなんの役にもたないだけだなく、むしろその解決を阻止する役割を演じたということであった。具体的には、第一に、西田哲学の主流は京都学派（柳田氏もその一員）であったが、海軍と結びついて侵略戦争を合理化する理論を展開した。第二に、終戦直後、日本の大衆は酷い経済窮乏に陥ったが、西田哲学は大衆を窮乏から救う道を示さ



柳田謙十郎

ななかった。第三は、日本民族は有史以来はじめて独立性を失いアメリカに対して従属状態に置かれたが、

この日本民族独立の問題に対して西田哲学は理論を展開しなかった。第四に、日本は自分が行った侵略戦争を反省して、平和憲法まで作ったが、軍国主義は急速に復活しつつある。西田哲学は平和の問題についてなんらの指針を与えなかった、というものであった。

柳田氏は、河上肇博士とも親しく交わり、その生き様に感銘し「自分も河上先生のようにになりたい」と言っておられた。柳田氏は、「自らも子息を失った戦没学生の会」「わだつみ会」の代表、日本労働者教育協会会長、晩年には、中国の毛沢東が主導した「文革」の名を冠した権力闘争で多大な被害を受けた日本中国友好協会の会長も十年務められた。私も日中友好協会の職員として、柳田氏の話や人柄に身近に接する光栄を得たが、「真理が大衆をつかむとき歴史は動く」「わが生涯を働く人々とともに」などの色紙を多く書かれた。その言葉を地で生きぬかれた生涯であった。当時若かった私たち青年世代に「坂本龍馬が生きていたら統一戦線を中心になっていただろう」と話していただいたことも未だに鮮明に覚えている。

|| 日中友好協会副理事長・大田宣也さん

「戦争に協力」は周知、だが…

寺内さんの西田の記事については特に間違いはないと思います。しかし西田の戦争協力については、事実でありますが記事にあるように必ずしも故意に隠されているわけではありませぬ。西田哲学研究者の間でもそれは承知のことです。また、それを知らない人がいることも確かですが全員ではないし、知らない人はたいして勉強していないミーム的な

素人です。記事にある佐伯氏は哲学者でもなんでもない御用経済学者で大変な迷惑物です。このような人は何処にでもいますが、西田哲学会では相手にしていません。昨年度の夏期講座に何故か講演されましたが、ひどい内容でした。さすが、学会でも懲りたのでしよう。もう二度と呼ばないでしよう。私もぼろくそに質問しました。西田哲学会はこのところ政治的には中立の立場です。戦争協力の研究も京大などの研究発表会などでも行われます。「京都学派と日本海軍」(PHP新書)など海軍との関係「大島メモ」などをめぐり検証もされています。いわゆる京都学派という先生方の報告ですので若干擁護になりますが、まあ学会は今のところ良識派がおおいのですが、今後どうなるかは分かりませんが、少なくとも私達一般会員の発言力もあるので今野さんや私も注視しています。亡くなった杉本さんも文科省による国立大学統制には断固反対していました。また、哲学館係員が「近衛」を知らないというのも揚げ足取りのように感じます。会館を弁護するようですが、別にNHKの報道があったから展示を変えたのではないと思います。NHKの番組自体はそう新しい内容でもありません。西田哲学をまじめに勉強している人ならば誰でも知っている事柄です。西田の戦争協力については擁護、否定等様々な研究もありそれらも多分寺内さんは読んでおられると思います。所詮、西田は国立大学の上級公務員。多くの当時の人々と同じく体制内の学者だと思えます。西田や、哲学館、そして研究者は現在も国まるかかえというのは変わりませぬ。西田の思想は「近代の超克」での会議の流れにあると思います。近代||西欧として日本||東洋を

立て、「哲学的」に歴史を解釈しようとして
います。しかし、哲学Ⅱ歴史ではないのでど
こかに矛盾が出てきます。寺内さんは哲学を
学んでおられるらしいのでその方面からの記
述もありますが、それについては余りに一面
的で単純化されているので賛成できません。
ヘーゲルやハイデガーが国家主義者であると
いうのは余りに単純すぎると思います。

いずれにせよ、哲学であれなんであれイデ
オロギーで解釈すればどうにでもなるし、哲
学者であろうと時代の人にはかわりありませ
ん。

現在のような世の中が全体に右よりになっ
ている状況での対抗的主張は分からなくな
いですが、あまりエキセントリックになると
同類になるように思われます。

Ⅱ 西田哲学会・若山哲郎さん

〈歴史的世界〉について

はじめに、下文を、ご覧ください。

「ここに2冊の本がある。1冊目は、『村に火をつけ、白痴になれ』というタイトルのすべてを込めたがゆえに、的を射たあの与謝野晶子論については、すっぱりと抜け落ちていく。」

これは、昨年石川県西田幾多郎記念哲学館主催への参加希望にあたっての事前のアンケート欄の「最近興味のある事・本など」への私のコメントです。ここでの本とはアナキストの大杉栄の研究者でもある栗原康氏の伊藤野枝論を岩波書店から出版されたものです。コメントは、同書を読んだ後の私の少し落胆した思いをそのまま書き記したものです。伊藤野枝が書き下ろした「評論家として

の与謝野晶子氏」についてはまったく触れないで書き進められていることに啞然としていたそのようなタイミングでもあり、同書へのコメントと他の1冊とともに紹介させていたできました。いやいや。いつものことですがこの件については、哲学館での講座期間中まったく話題にはなることもありませんでした。

さて。ここまでお話を進めさせていただいて、やつと寺内徹乗さまの「鶴彬通信 はばたき」第27号を拝読させていただいたことに移らせていただきます。この冊子は、縁があつて平野喜之様さまからいただきました。冊子を受けとるとき、平野さんが配布された方々に一様に寺内さんへ感想を書くように促されていましたが、正直のところ私自身、寺内さまが「さて、あなたはどちら派？」と畳み掛けられているような副題に少し違和感を抱き、その場はただ聞き流してしまつた記憶があります。

ところで、栗原康氏の著作に戻りながら考えることがあります。既に初見で感じましたように、失礼ながら寺内徹乗さまの論旨についてどこか腑に落ちないところがあるのではないかと、今も考えています。西田は、寺内さまが引用されている「世界新秩序の原理」も含めて最後の完成論文でもある「場所的論理と宗教的世界観」にも、ご指摘の（日本）又は（東亜）等の言葉がやたら書き記されています。寺内さまの今回の論旨はそのことについてご検討されたもの、と推察されます。

しかしながら、私は引用されている「世界新秩序の原理」にある〈歴史的世界〉という語にこそ関心を向けています。つまり、寺内さまの関心と私の関心があると違つて

いるということになるわけです。が、実はこの〈歴史的世界〉という語は故 杉本耕一氏の著書『西田哲学と歴史的世界』から影響を受けて見出したものであり、先のアンケートの2冊目に、その天折を惜しみつつ取り上げています。この〈歴史的世界〉という語について今は詳しく語ることはできませんが、寺内さまが引用されている「世界新秩序の原理」の中から特に〈世界〉という語に絞つて、少しこれから話をさせていただきます。

当該の西田の論文が三つの概念で構成されていることに寺内さまは気付かれていますことと思えます。例えば、〈世界〉をいかに考えていくかで〈新秩序〉の〈原理〉と成りえるのかを西田自らが考察の主題としていたのではないかと解題できるのだとするならば、西田独自のそうした抽象的な言辞の数々に、ことさらに多くの方は戸惑いを感じられるようです。寺内さまのご批判は、こうしたところそしてそのような言い回しこそが結局に合致していたのではないかと、詰問されています。歴史的な経緯を辿れば忽（ゆるが）せにはできない事実があり、今後も、これらは議論の対象となるのは明らかでしょう。

ところで、やはり考えなければならぬのは、〈世界〉についてです。一般に〈世界〉という言葉を語る際、いくつかの形容詞の後に使っています。〈単一の〉〈多様な〉〈多元的な〉とそれぞれの意味合いを含まらせて使ったり、更にはあまりなじみのない音楽用語のポリフォニーな〈世界〉だとも語られたりもしています。ポリフォニーは多声であり、合唱又は交響曲のイメージがあります。言葉はまるで生き物のようです。

さて、ここで大きく飛躍しますが、西田に

おいての「世界」は、あの難解極まりのない「絶対矛盾的自己同一」の世界ではないかと、私は何の論理の裏打ちもなく考えたりしています。勿論私個人の見解ですが、ポリフォニール的である世界として歴史(的)世界を西田は慎重に語り始めたのではないかと、考えたりもします。ただこのような西田の思索は、重大な局面に立っていたからこそ、今のわれわれにも学ぶことが多々あります。まず思索されている課題があまりにも重層性に富んでおり難事であることがそのまま非難の対象となりやすく、現実においては、いとも軽々に翻弄されやすくなってしまうこと、たという事です。こうした事態を、生きることの難しさと、理解してもかまわないとこ

ろでしょう。ここで結論を急げば、更に、補足しなければなりません。それは「世界」を各層の人々がいかに考えていたのかを一層探求しなければならぬこと、「世界」に触れている著作を読むわれわれの責任でもあること、つまりわれわれもこうした現実の世界に立ち会っているのだということを西田の著作を目の当たりにして、やっと考えなければならぬことだとわかったりします。

この手紙は、栗原康氏の伊藤野枝論からはじまり、寺内さまが引用された「世界新秩序の原理」の仕方までを問題としてきました。いえない。私の「世界」への単なる思い付きこそが一笑されるべきものかもしれません。御研鑽を積まれた論文に対して、私こそ叱責を受けなければなりません。御笑罵下さい。

|| 奈良市・今野康久さん

これまで皇道哲学に堕していたとは

拝復 お送り頂きました、はばたき第27号の中の、西田幾多郎先生の哲学を鶴彬師と対して分析されている寺内徹乘氏の論攷は、実に実に有り難いものでした。

といいますのは、まさに寺内氏が指摘しているとおおり、私は恥ずかしいことですが、これまでの西田哲学の一般的な「名声」を鵜呑みにしていたので、西田先生が「世界新秩序の原理」の末尾の部分で、ここまで皇道哲学に堕していたとはまったく知らなかったからです(ハイデッガーがナチズムに協力したことについては、若干知っていました)。

私は、人間の正しい生き方を決定するものは、信仰と哲学しかない信念しておりますが、しかし戦前戦中の日本の宗教各派(キリスト教も入れ)が皇道宗教に堕したこと、それも仏教の根本価値観は大慈大悲であり、五戒の第一には不殺生戒(キリスト教の十戒に不殺生はありません)が規定されているにも拘わらず、宗教各派はこの点に関する教理的検討・苦悩もなく、皇軍の侵略戦争を督戦したことを極めて残念に思っております。

これに較べて、三木清先生は終戦直後、先生の解放を仲間が直ちに要求しなかったので獄中病死したこと、三木清先生は一貫した反体制的哲学者と思ひ込んでおり、その雰囲気から西田哲学も孤高を守る哲学であったと思ひ込んでいました。まさか積極的な翼賛派でその思想的リーダーだとはまったく思っておりませんでした。

そこで寺内氏の論攷で、西田哲学と三木哲

念論の危険さを改めて思い知らされたのです。だからといって私は、現在のアメリカや日本に盛り上がる反知性主義は唾棄しますが、どうしたら信仰と哲学が権力や自己の弱さにぶれないで、常に正しい生き方を指導して呉れるかを考えさせられたのです。

ところで私は、戦争法反対で何度か国会デモに参加しておりますが、現代は日本ばかりでなく世界中が国家権力の肥大化、管理社会への暴走、核戦争の危機にあり、80年前の第2次世界戦争の時流・風潮・「文化」とまったくかわりありません。

頂いた鶴師のDVD・こころの軌跡、には国防婦人会の女性が出てきて鶴師をなじりますが、現在の、稲田防衛大臣や高市総務大臣も当時の婦人会の言動と同じです。

さらにトランプは難民排斥、7ヶ国の国民の入国禁止、安倍氏はこのトランプと男芸者のような外交をしています。これを日本は国をあげて喜んでおり、戦前戦中と同じ精神構造です。この人類の危機状況において、どうしたら正覚を保ち、斗つていけるか？ 私は毎日考えております。

私は鶴師の生きざまを自分のものとし、反戦・民主主義徹底の活動をしなければならぬのです。鶴師は、生きる目的であった川柳の活動を徹底的に弾圧され、生活する仕事をとり上げられ、拷問を受け、監獄に入れられながら、それでも何故、鶴師は当時の時流・権力に流されなかったのでしょうか。

鶴師が生涯正覚を失わなかった理由は、8才で父を亡くし、母は他家に再婚し、養子の立場で生活することを強いられ、収奪される労働者と共に生き、常に弱い立場で生活し、生来的な正義心・心からの優しさが、さらに

現実の不条理の体験によって研ぎ澄まされたのでしよう。加えて生まれつきの理解力抜群の能力とさらなる勉強、そして良き師や仲間恵まれ、鶴師の優れた社会分析と川柳が人に迎えられ、鶴師は自己の生きる目的と生きる確証を得たのでしよう。

伏す針の 鋭き色を ひそめ得ず

|| 東京都・日蓮宗僧侶・弁護士

山口紀洋さん

寺内論者に全く同感です

全く同感です。「天皇陛下万歳」「お母さん」で死ねない人間が「絶対矛盾自己同一」で死んでいった。私はそれを言い続けてきました。

|| 金沢市 元金沢大教授・半沢英一さん

未踏の西田哲学へ踏み込んだ勇氣

知らなかつた驚くべき事実。今までの不勉強が恥ずかしい……。

郷土の誇るべき偉人と教えられ、「中身」を調べることもなくそのまま信じ込んできた、かほく市が生んだ西田幾多郎。「はばたき」を手にして何度も読み返した。「世界的な哲学者」が、実はあの大战を引き起こした軍国主義者の精神的支柱だったとは！

今までそのことを取り上げて問題提起した人が果たしていたのだろうか。西田記念館へは何度か足を運んだが、それらしいことを説明したものにはお目にかかった記憶がない。戦争に命を張って抵抗した鶴彬の「後継者」の皆さん、さすがです。未踏の領域に恐れることなく踏み込んで、私たちの目を開かせて

くれた。

寺内さんの論文で、西田幾多郎の哲学的論述は私にはほとんど理解の外であるが、戦争に対してどんな姿勢を取ったかという観点から鶴彬との接点を見つけ、対比していることがよく理解できる。それは抽象的な表現の対比でなく、片や年数千万円の市費を記念館につぎ込み、さらに1億円かけてライトアップしようとしていることと、ほとんど公のバックアップのない鶴彬という現実を見て、これでいいのかという義憤を寺内さんは感じたのだと思う。その義憤を市民にぶつけ、考えてもらおうとしたのだろう。戦争に協力したという、ほとんど知られていない「西田の本当の姿」を明らかにした貴重な論文である。

「あなたはどちら派につくか」「いま世に問う功罪」というソフトな表現で私たちに問いかけ、一人一人に己の態度をはっきりさせるよう迫っていると思われる。そして究極には、そんなに金をつぎ込んで顕彰する価値が西田にあるのか、と問いかけていたのである。

西田哲学の神髄というものは難しく私にはわからないが、軍国主義のバックボーンとなつたことは凡々たる私にも許せないことだ。たとえ西田哲学そのものが日本の哲学界をリードし、世界的にも多大な影響を与えたとしても、戦争協力という側面から見れば認め難い存在である。

寺内論文の後に載っている西田の「世界新秩序の原理」を読むと、「八紘為宇（八紘一宇）」とか「東亜共栄圏」がよく出てくる。そしてまた「我國の皇室は単に一つの民族国家の中心と云うだけでない。我國の皇道には、八紘為宇の世界形成の原理が含まれているのである」とし、天皇制国家の日本が世界

の中心にならねばならないとしている。これだけを読んでも西田が戦犯リストに載ることは間違いないであろう。それを今、多額の公費をつぎ込んで讃えようとしている。市の幹部、教育関係者の見解を聞きたいものだ。また、西田哲学の信奉者たちは何をしてきたのか。都合の悪い部分には目をつぶってやり過ごそうとしてきたのか。弁明をぜひ聞きたいものだ。

|| かほく市 鹿島宏司さん

いやいやながらの戦争協力

『はばたき』誌27号拝読しました。寺内徹乗先生の論文は熱意のこもった力作であると思います。私としては少しも誤りはないと思います。しかし同時にこれに反対する浄土真宗の僧侶の方がおられるということも理解できます。その点を以下に書いてみたいと思います。

西田幾多郎が先のアジア太平洋戦争に協力したことは、まぎれもない事実です。しかし彼はしぶしぶ協力させられたというところがあります。ところが、彼の弟子たち、いわゆる京大学派の人々（代表は当時の西田の後任の京大学教授であった高山岩男、京都大学・人文科学研究所教授・高坂正顕、当時若手の西谷啓二、鈴木成高の4名）、この人々は『世界史の哲学』という書物を出版し、大いに「大東亜戦争」を賛美し侵略戦争を鼓吹した人物でこれらの人々は、まさに戦争責任者でした。当然、戦後公職追放になりました。この人々の戦争責任と、西田の戦争協力との関係がしばしば混同されて、論じられる傾きがあります。寺内論文に、これらの（高



向かって左端が高坂正顕。右端が高山岩男。手前が西谷啓二。田邊元(左から⑤)や天野貞祐(右から②)も映る。昭和16年

山、高坂、西谷、鈴木)などがほとんど出てこないのは気にかかることです。これら4人組は文字通り戦争協力者です。積極的協力者です。これと西田幾多郎本人とは違いますが、西田はいやいやながらも協力させられたという立場です。これは区別した方が良いと思います。もちろん、いやいやながらも協力したのも、責任がありますから、そこは寺内論文の言う通りです。しかし、積極的に協力したのと、いやいやながら協力したのは、違いは大きいともいえる訳で、これが浄土真宗の僧侶の方の意見であると思われるま

す。西田は寺内論文にもあるように、昭和10年の文部省の「教学刷新評議会」(これは左翼学生の思想善導を狙ったものであり、戦争に向けて若者の思想右傾化を図ろうとしたものですが)の委員に任命されたときに、第1回だけ出席したが、第2回目からは、出席を拒否して、「国粹主義で大学を固めようというようなことでは、日本の大学はだめになる」という意見書を出したことで有名です。しかし昭和の18年、戦争末期になると、寺内論文にある通り、「世界新秩序の原理」というようなところまで後退したのも事実です。これはやはり重大です。また西田の弟子には先のような右翼的な人物だけでなく、三木清のほか、反戦平和で戦った戸坂潤、船山信一、甘粕(見田)石介、梯明秀など多くの唯物論者もいて、西田という人は、なかなか幅の広いという面もあります。これらの面を考えると、先の浄土真宗の僧侶の方のような意見も出てくるのだと思います。

以上、私見を述べましたが、①西田本人と、その弟子4人組とは区別した方がいい。



鈴木成高

②しかし寺内論文は大枠において、間違っていない。③鶴彬顕彰会は西田と切り離して、大いに顕彰事業を

進めていただきたい。寺内論文に疑問を持つておられる人も含めて、一大顕彰運動にしたい。哲学者で言えば現在、西田哲学をいまだ信奉する梅原猛のような人も、9条の会の呼びかけ人になり、安倍政治は許せないと声を上げておられる時代ですから、協力できます。西田哲学問題はひとまず脇において、鶴彬顕彰と野党団結を進めるべきと考えます。

関西大学名誉教授、全国革新懇代表世話人 鮎坂 真さん

寺内論考は重要な問題を指摘

鶴彬通信「はばたき」を拝見する機会があり、とくにその第27号のご論文「西田幾多郎の知られざる闇」を読んで共感しました。哲学の研究者としてもぜひ考えていくべき重要な問題を指摘されていると思います。

秋田大学教授・勝守真さん

天皇のため死ぬことを是とした哲学

西田幾多郎は「金沢ふるさと偉人館」に金沢ゆかりの偉人として紹介されているし、「西田幾多郎記念哲学館」は建築家・安藤忠雄が設計したことの興味で何度か訪ねたことがある。高校生のころ「善の研究」を読んだが、全く理解できず、哲学とはなんと面倒なものかといふかった記憶がある。多くの地元の方々も同様だと思うが、ただ「郷土の偉人」として名前を知る程度であった。

今回「はばたき」掲載の寺内徹乗氏の論文を読み、西田幾多郎を調べてみようと思った次第である。

西田幾多郎は難解である――

「非連続の連続」「死して生きる」「絶対矛盾的自己同一」「自己は自己を否定するところにおいて真の自己である」など用語や記述に慣れないと理解が進まない。どうも西田幾多郎信奉者はこうした西田幾多郎の言葉の魔術に取り憑かれ、謎解きするように西田哲学にはまっているように思える。インターネットのおかげで様々な立場の先達の解説などを通しておぼろげに分かってきた西田像を私なりに記して寺内氏の論文を読んだ感想にしたいと思う。

西田幾多郎が晩年に到達したという概念に「絶対矛盾的自己同一」というものがある。哲学の専門家も飛び切り理解しづらいそうである。なんせ「矛盾」に絶対という形容詞をつけることからしておかしい。「現実の世界とは物と物との相働く世界でなければならぬ」と始まる「絶対矛盾的自己同一」なる論文を読むと極めて難解であるが、つまるところドイツのヘーゲル哲学という「正・反する二つの対立物（矛盾）」を止揚し、新しい段階で解決する（テーゼ⇕アンチテーゼ⇓ジンテーゼ）ということではなく、対立矛盾をそのまま残した状態で同一化する、つまり「対立矛盾」とは実は一体であることを「実感」することが真理であるということのようである。これは《悟り》の境地で、宗教の世界である。西田が禅に没頭しながら得た哲学的方法論であるが、これは般若心経にある「色即是空、空即是色」と共通するのではないか。

「色即是空、空即是色」をネット辞典では次のように解説してある。「色とは目に見えるもの、形づくられたものという意味で、そ

れらは実体として存在せずに時々刻々と変化しているものであり、不変で実体はなく、すなわち「空」である。「空」は「無」や「虚無」ではなく、存在する宇宙のすべての物質や現象の根源には目には見えないが、エネルギーがあり、宇宙に存在するすべてのものはこのエネルギーが刻々形を変えているものである。」

西田はこの禅をベースにした思索で西洋思想と東洋思想の融合を目指した。その結論が日本を中心にした東洋思想、中でも日本の思想が世界で一番優れ、将来この思想で世界統一を果たすべきである、今時の世界大戦は絶好の機会である……、と主張することになった。

つまり、西田幾多郎はたんなる思考の枠を超え、深まっていく戦争に対して「八紘一宇」の思想で大東亜共栄圏実現を妄想したようである。大東亜戦争を肯定し、国民を総動員し思想統制を推進した現実政治に深く関わっていた。

例証として西田の論文をいくつか抜粋してみたい。

1. 八紘一宇の思想で大東亜戦争を肯定した――

「世界的世界に於ては、各国家民族が各自の個性的な歴史的な生命に生きると共に、それぞれの世界的使命を以て一つの世界的世界に結合するのである。これは人間の歴史的発展の終極の理念であり、而もこれが今日の世界大戦によって要求せられる世界新秩序の原理でなければならぬ。我国の八紘為宇の理念とは、此の如きものであろう。畏くも万邦をしてその所を得せしめると宣らせられる。聖旨も此にあるかと恐察し奉る次第である。」

『世界新秩序の原理』

2. 天皇中心の歴史を肯定した――

「何千年来皇室を中心として生成発展して来た我国文化の迹を見るに、それは全体的な個体的多との矛盾的自己同一として、作られたものから作るものへと何処までも作ると言うにあつたのではなからうか。全体的一として歴史において主体的なものは色々に変つた：しかし皇室はこれらの主体的なものを超越して、全体的一と個体的多との矛盾的自己同一として自己自身を限定する世界の位置にあつたと思う」『日本文化の問題』

3. 八紘一宇で世界統一を構想――

「世界的世界形成主義とは、我国家の主体性を失うことではない。これこそ己を空うして他を包む我国特有の主体的原理である。之によって立つことは、何処までも我国体の精華を世界に發揮することである。今日の世界的課題の解決が我国体の原理から与えられと云つてよい。英米が之に服従すべきであるのみならず、枢軸国も之に倣うに至るであらう。」『世界新秩序の原理』

4. 国民は国家のために喜んで命を捧げるこ とができる――

「国家とは、それぞれに自己自身の中に絶対者の自己表現を含んだ一つの世界である。故に私は民族的社会が自己自身において世界の自己表現を宿す時、即ち理性的となる時国家となるのである。此の如きもののみが国家である。かかる意味において国家は宗教的である」歴史的な世界は、その根底において、宗教的であり、また形而上学的であるの

である」「宗教を否定することは、世界が自己自身を失うことであり、逆に人間が人間自身を失うことである」「場所の論理と宗教的世界観」

言い回しは難解であるが、国民は国家のために喜んで命を捧げることができ、大日本帝国の戦争遂行に都合がよいわけである。また「異朝（外国のこと）には甚たぐいなし」という我が国の國體には、絶対の歴史的世界性が含まれて居るのである」。つまり、世界的自覚の時代に導くための主義を持ち合わせている国は、「己を空うして他を包む」特有の精神を持つ日本という国以外には存在しないと主張している。（参考＝壺齋散人「廣松渉の西田幾多郎批判」）

5. 「非連続の連続」とは死ぬことに恐れをなくする――

有名な「非連続の連続」という言葉、自己が「永遠の今」である各瞬間において「死んで生きる」とした。こうして次の瞬間の自己に飛躍する。これを「非連続の連続」と呼んだ。これが教育現場や現実社会に持ち出され、思想動員の掛け声に利用されたようだ。「天皇の為に死ぬ」ことが怖くなくなり、「敵艦に体当たりして靖国神社で会おう」と特攻隊のスローガンになったことは容易にわかる。

ところで西田は日本の政治体制や天皇という存在をどうとらえていたのだろうか？

西田は日本文化を「何千年來皇室を中心として生成発展し来った我国文化」と規定し、天皇制について「歴史は色々変わった。しかし皇室はこれらを超越して矛盾的自己同一と

して自己自身を限定する世界の位置にあつた」とした。

この論理で考えると、『目の前に軍服を着る生身の人間』と『神武霊を自身に受け継ぐ神』という『絶対矛盾(一)』を自己同一する『現人神』が出来上がる。この現人神崇拜で国民を戦争に動員し、大東亜戦争を経て英米、枢軸国（独伊）もこれに従い、世界平和が達成できるであろう、と戦争後を構想していたことが分かる。（『現人神』については小生の過去の小論『現代の落首―大嘗祭を考える』（ナギの会HPを参照）。

ここまで検討したが、最初の問題提起に振り返ってみる。

西田幾多郎を称える人は石川県や生地かほく市などにおられると思うが、西田幾多郎の思想は「哲学館」に行っても分からないだろう。彼の戦争への関わりも皆無である。しかしこれは地元だけのようで、ネットでは意外に多くの西田幾多郎の戦争と関わる情報がある。戦後、京都学派と言われる多くの哲学者は戦争責任を問われ公職追放になったが、石川県に限っては地元の偉人に傷を付けたくない近親の思い？ なのだろう、戦争とは無縁で「無」を探求した思索家とされている。西田幾多郎の出身宇ノ気小学校では彼の命日に『西田先生を讃える歌』を市長や市議らの前で歌っているという。

一方、戦争に深い責任があるのは西田の弟子達だという意見も散逸する。これは西田の死後収集された書簡集などで、西田は戦争に否定的だったと理解しようとする。しかしこれは寺内論文が指摘する次の指摘で簡単に崩れてしまう。

「それを言い始めれば、東京裁判で裁かれ

た人たちも、真珠湾攻撃を遂行した山本五十六も、本当は戦争に反対だったと言うことになる。戦争してみたかった、などと言う人はいない。大事なは何を思ったかではなく、何を発信し、実行したかである。」

また、西田の弟子達、京都学派の戦争責任についても「大島メモ」なるものにより擁護する意見もある。この「大島メモ」は主要学者と海軍幹部で行った秘密会議メモで、会議の世話役だった大島康正の死後、二〇〇〇年（平成12年）に発見されたものである。戦争を主導し拡大した陸軍に対しそれを牽制すべく海軍幹部と京都学派メンバーが極秘に会合を持った内容で、京都学派を免罪するかのようでもある。メモには東条内閣の打倒や敗戦後の復興方策も含む内容が記されているが、読めば読むほど西田幾多郎や弟子達の戦争との深い関わりが浮き彫りになる。（『京都学派と日本海軍―新資料『大島メモ』をめぐる』（大橋良介著・PHP新書）

なお、この「大島メモ」の会合に一貫して参加している学者に能登町出身の西谷啓治がいる。かれは戦後、公職追放となった西田の弟子である。

『西田幾多郎と戦争責任』については、二〇一三年1月21日Eテレで放映されたドキュメンタリー番組も興味深い。この『日本人は何を考えてきたか 近代を超えて』西田幾多郎と京都学派』はYouTubeで視聴できる。この番組で西田の戦争との関わりを知って驚いた人もたくさんおられたようである。

西田幾多郎の「神」についての話に戻るが、彼の最初の論文『善の研究』の最後第十章が「実在としての神」についての一章である。その結びに次の記述がある。「宇宙の統

一なる神は実にかゝる統一的活動の根本である。我々の愛の根本、喜びの根本である。神は無限の愛、無限の喜悦、平安である」と。この文章と現人神を結びつけて考えると、西田幾多郎の超非科学的論理が明らかになるのではあるまいか。

ついでのことであるが、現在問題となつてゐる天皇の退位問題で一言。退位後の呼称について、「前天皇」「上皇」「太上天皇」「仙洞御所」などが取りざたされているが、冷静に考えてみると、現天皇が憲法上の象徴天皇という拘束から離れるのだから「人間宣言」どころ一般国民に戻る仕掛けがあつていいのではないか。名字も必要であろうから国会決議で天野(アマノ)姓を贈り、天野明仁さんとして還俗していただくのはいかがであろうか。

さて、寺内徹乗氏の論文をきっかけに西田幾多郎を考えてきた。寺内氏は「戦後、西田哲学を崇めている人は、一部の極右思想家だけです。今の日本に西田哲学の影響力は全くありません。(あつたら大変です)」と書いているが、西田幾多郎の思想は死んでしまったのだろうか？

昨今のニュースでホットな話題に森友学園事件がある。幼稚園児に教育勅語を朗唱させたり「安倍首相ガンバレ」と叫ばせる園長が登場したり、「この園の教育が素晴らしいか



大東亜聖戦大碑(金沢市)

らお手伝いしたい」と名誉園長に就任した首相夫人や多くの政治家が現れた。

その人たちの共通項は「日本会議」である。日本会議は「美しい日本の再建と誇りある国づくり」を掲げ、外国では極右団体として知られ、日本の右傾化の象徴的なものとして報道されている。主張を見ていくとその発想は西田幾多郎の『世界新秩序の原理』そのものである。

日本会議は一九九七年五月に発足した。これに協力する「日本会議国会議員懇談会」も森喜朗元首相などの呼び掛けで結成され、現在名を連ねる衆参両院議員は約二八〇人、国会と地方議会に強い影響力がある。なにしろ現安倍内閣の閣僚には首相を筆頭に75% (15人) が日本会議のメンバーである。

西田幾多郎の思想は日本会議を介して完全復活を遂げたと見るべきではないか。

地元金沢からみれば『大東亜聖戦大碑』設立も見逃せない。この高さ十二メートルの石碑は「日本をまもる会」によつて二〇〇〇年(平成12年)8月4日、兼六園裏、石川護国神社の参道に建てられた。裏面には「八紘為宇」が大書きされている。毎年「大東亜聖戦祭」が地元新聞社などの後援で開催されている。

以上、西田幾多郎を知るきっかけを与えてくれた寺内徹乗氏の調査研究に感謝し、小生の昨今の社会風潮への「警鐘」を披瀝し結びたい。

付記。寺内徹乗氏の論文の最後に西田幾多郎が知人に宛てた最晩年の私信が紹介されている。「どうもひどい世の中になりました。……やはり全体主義といふものはだめなものかと存じます」という自己否定の文言である。この私信が西田幾多郎信奉者への慰めになるかもしれない。

|| 金沢市・ナギの会 渡辺寛さん

今も研究する価値がある西田哲学

1. さて あなたはどちら派」という表現について

一頁の「天皇制国家、軍国主義容認の西田」と「軍国体制に命をかけて抵抗、平和を希求した鶴彬」という言葉によつて、そしてまた、この機関紙を発行している会が「鶴彬を顕彰する会」であることによつて、鶴彬を顕彰するために西田幾多郎を貶めるという文脈が生まれてしまっている。しかし、そもそも鶴彬を顕彰するのに西田を貶める必要があるだろうか？ これが、私の疑問点である。

そういう手法をとることは、直接鶴彬の値打ちが下がることには結びつかないとは思いますが、このような手法を使つてまで鶴彬を顕彰しようとする、この会の値打ち、この機関紙の値打ちが、下がることには結びつくだろう。そしてそれは間接的に、この会の活動に、あまりよくない影響を与えることだろう(会への信頼度の減少)。

哲学者である西田と川柳作家である鶴を比較すること自体、あまり意味がないとは思いますが、もし比較するならもっと表現に工夫が必要だろう。「あの日本を代表するような哲学者西田でさえも、時代の波に飲み込まれてしまったのに、鶴彬は飲み込まれるどころか、飲み込まもうとする波の正体を見抜き、そしてその正体の子供にもわかるようなやさしい言葉で表現した。鶴は非常に稀有な存在である」という言い方なら、まだましだろう。もし書くなら、西田幾多郎のファンや讃迎者たち、研究者たちにも、「あの西田やその弟子たちも乗り越えられなかった国家権力からの

重圧をものともしなかつた鶴彬つてどんな人？ そんなすごい人がまだ知られずにいるとしたら、もつたいない」と思ってもらえるような、そういう論文を書くべきだろう。

しかしこの論文のスタイルは、西田哲学や西田記念館と対決する姿勢が感じられる。それはよくないと思う。

2. 西田哲学に対する過小評価

この論文には、西田哲学のある一側面のみに対する批判が散りばめられている。確かにそれが、西田哲学の弱点であることは否定できないうと私も思う。しかし、もしその部分を本気で論ずるなら、西田哲学の評価すべき部分も十分述べたうえで論ずるべきである。そうでないと、西田哲学そのものがまったく研究する値打のない哲学であると誤解されてしまうだろう。実際にそれに近いニュアンスの記述もある。もしかしたら、西田記念館にいろんな意味でお金をかけ過ぎであるかもしれないが、西田哲学が研究に値しない哲学とはまったく考えない。

私は五年以上前から毎月、京都で西田幾多郎の最後の論文である『場所的論理と宗教的世界観』を、西田哲学研究で京都大学の博士号をとった若手の研究者と、そして、浄土宗、浄土真宗の僧侶たち研究者たち、立命館大学でドイツ語を教えるニーチェ哲学専門の先生や、主婦、三〇年以上も西田記念館に通っている人たちと勉強会を開いている。そこで私自身、西田哲学から、仏教の普遍性を理解する上で大きな示唆を受けている。

西田が鈴木大拙に送った手紙に、この『場所的論理と宗教的世界観』の論文を書く動機

を西田自身が「浄土真宗における世界観を哲学的に明らかにしたい」と言っているし、この論文の一番最後の言葉（私は国家という問題につまずいたことの反省に基づく西田の遺言と捉えている）は、「私は此から浄土真宗的に国家と云ふものを考へ得るかと思ふ。国家とは、此土に於て浄土を映すというものでなければならぬ」というもので、私が「はばたき」に3回にわたって掲載させていたのだいた論文も、西田のその発想に基づくものである。

また、仏教者の戦争責任を厳しく追及し、後には還俗した市川白弦氏の『仏教者の戦争責任』という本の中に西田幾多郎論があり、西田の思想がかなり厳しく批判されている。市川氏は寺内氏の言うように「対象論理（わかりやすくいうと、主観客観でものを認識する論理）」を軽んじたために、社会科学の視点で失われることが時代状況に飲み込まれる大きな原因の一つであることを指摘したうえで、その論説の結びのところで「述語主義の論理は主語的な皇道を根源的に否定する底のものである」と述べている。寺内氏の言うように、主語のない論理が無責任に結びつく可能性は否定できないし（市川氏も論説でそのことを注意している）が、述語主義の論理は絶対の権力（当時の国家権力）主権者である天皇の権力（を否定する可能性も持っていたのである）。

そしてまた、その「場所の哲学」は現在、禅宗や宗教哲学にとどまらず、精神医学（現象学的精神病理学）、生命科学、言語論にも、直接にも間接にも影響を与え、それは海外でも高い評価を受けている。

3. 西田幾多郎をはじめとする京都学派の戦争責任の問題は、一九九五年（戦後五〇年）以降、とくに、二〇〇〇年に「大島メモ」が発見されて以来、たびたび、そのことについての研究発表がなされている。また西田哲学会も、学会に属する知人の話によれば、思想的な、あるいは政治的な偏り（たとえば、右翼とか左翼とか）がないようにチェック機関が設けられていて、今さら大騒ぎする必要はない。

ただ私は、鶴彬を顕彰するという文脈で、西田の戦争責任の問題を論じるのはよくないと思うが、西田の戦争責任の問題を知らないかほく市民に、そのことを知らせることは、とても大事なことだと思う。なぜなら、西田記念館がそのことを積極的にかほく市民に知らせると思わないからである（もちろん、こども向けのマンガにまで西田の戦争責任の問題を描くというのは、私はその必要も感じないし、また難しいだろう）。

だからこそ、それだけに今回の寺内氏の論文の書き方は残念でならない。どうしてかと言うと、たとえば政党どうしの政策をめぐる争いでもそうである。たとえ、本人が本当に国民のためを思って発言していたとしても、自分の党の意見こそ優れている、という、覇権争いの言説かもしれないという疑いが見られた場合、その言説の内容まで疑わしくなってしまう。

今回の寺内氏の論文の内容も、研究者の間では論じられて久しいし、よく知られているかもしれないが、西田記念館にお金を出している人たちによく知られているとはまったく思わない。だから、それを知らせるのは大変意味のあることだと思う。しかし、鶴彬を輝

かせるための材料として、また鶴彬を顕彰する会の利益のために論じられているということになると、その言説を素直に読めない人も少なからずいることが予想できる。

こういう大事な内容は、西田幾多郎や西田記念館との対決という文脈の中で語られるべきではなく、もつと淡々と「こういう事実があります」と書いたほうが、説得力もあり、衝撃もあると思う。少なくとも今回の書き方だと、研究者が読めば「何を今さら大騒ぎしているのか。もしかしたら、今までそれを知らなかったのか」と思われるだろうし、また一般読者でも、「西田 対 鶴」などという簡単な図式を作って、読者に「あなたはどちら派」を呼びかける人は、善悪二元論に陥ってしまっていて、信用できないと思われるも仕方がないと思う。

確かに西田は、結果的に絶対無の場所と皇道結びつけ、戦争を肯定した。しかし、それをただ悪と断罪するだけではなくて、どうしてそうなったのか、そこにどんな苦悩があったのか、今後我われはどんなことに気をつけなければならぬかなどもまた、同時に述べる必要があると思う。

たとえば悪くしてお叱りを受けるかもしれないが、たとえば、一口に殺人事件といっても、いろんなケースがあるだろう。家族に保険金をかけてその保険金目当てに命を奪うことも殺人なら、介護に疲れて家族の命を奪ってしまふことも殺人である。同じ殺人であっても、これらを同列に論じることができるだろうか。後者の場合なら、そこにどんな苦悩があったのか、どうしてそうなったのか、避ける方法はなかったのかを模索して論じることが、裁判官でない我われには一番大事なことだろ

う。そのことによつて、同じような事件が起これない、あるいは起こさないための教訓を得ることができたり、社会や制度を変える取り組みも生まれて来るかもしれないからだ。そういうことを抜きにして、戦争に協力したから悪、戦争に反対したから善とするのはあまりに単純過ぎるし、そういうことは戦争犯罪を裁き、量刑を決める裁判所の仕事であつて、鶴彬を顕彰する会の仕事ではないはずだ。

以上が私の感想である。今回の論文は別として、今までの寺内氏のさまざまな活動に関して、私は尊敬の念を禁じ得ない。右傾化する今の時代の危機的状況の中で、政権を批判する文章を新聞に投稿したり、子供たちに鶴彬のことを分かりやすく伝えるために絵本を制作したり、西田の功績は賛美しても戦争責任のことを取り上げない雰囲気の中で、そのことを指摘したり、そういうことは勇氣と平和を愛する心がなければ、とてもできることではない。「はばたき」への論考も、すべて素晴らしい。彼は何を書いても一流だ。そういう意味では、作品の質の高さといひ、生き方といひ、私には寺内氏の姿は鶴彬の姿と重なつて見える。

こういう人が鶴彬を顕彰する会におられ活動しておられることは、かほく市だけでなく、日本社会の希望である。そして私もまた彼のように、この厳しい世において批判精神を失わず、彼と共に、そしてこの鶴彬を顕彰する会と共に、歩んでいきたいと願う。(文中太文字は平野)

|| 鶴彬を顕彰する会 浄専寺住職 平野喜之

(寄稿された順に掲載しました)

《鶴彬と同じ年に生まれた有名人》

- 鶴彬は明治42年(一九〇九)1月1日生まれ。
- 大岡昇平(3月6日、東京府生まれ) 作家。昭和63年年没(78歳)
- 淀川長治(4月8日、兵庫県生まれ) 映画評論家。平成10年年没(89歳)
- 松本 清(4月24日、千葉県生まれ) マツモトキヨシ創業者。昭和48年年没(64歳)
- 中島 敦(5月5日、東京府生まれ) 作家。昭和17年年没(33歳)
- 太宰 治(6月19日、青森県生まれ) 作家。昭和23年年没(38歳)
- 遠山 啓(8月21日、熊本県生まれ) 数学者。昭和54年年没(70歳)
- 益田喜頓(9月11日、北海道生まれ) コメディアン。平成5年年没(84歳)
- 二階堂進(10月16日、鹿児島県生まれ) 政治家(元官房長官)。平成12年年没(90歳)
- 杉山 寧(10月20日、東京府生まれ) 日本画家。平成5年年没(84歳)
- 土門 拳(10月25日、山形県生まれ) 写真家。平成2年年没(80歳)
- 上原 謙(11月7日、東京府生まれ) 俳優(加山雄三の父)、平成3年年没(82歳)
- まど・みちお(11月16日、山口県生まれ) 詩人。平成26年年没(104歳)
- 田中絹代(11月29日、山口県生まれ) 女優。映画監督。昭和52年年没(67歳)
- 埴谷雄高(12月19日、台湾生まれ) 作家。平成9年年没(87歳)
- 松本清張(12月21日、広島県生まれ) 作家。平成4年年没(82歳)

鶴彬の求めたりアリズム川柳

鶴彬の論文より抜粋

鶴彬は、西田幾多郎をどうとらえていたのか。カント、ヘーゲル、ベルグソンは西田に大きな影響を与えた哲学者です。主観と客観という矛盾する二元的対立は、西田により同一となり（絶対矛盾的自己同一）、自己（主）は世界（客）と同一化され融合されま

す。そこには仏教でいう「空」や「無」の思想が根底にあります。こうした観念論が普遍的な真実なのかどうかについてはさまざまご意見もあることでしょう。

ともかくも田中五呂八と木村半文銭という両川柳家は、こうした観念論に基づく神秘川柳（芭蕉主義・生命主義）を追求したのに対し、鶴彬はそれを批判。あくまでリアリズム（現実主義）川柳を追求しました。以下、鶴彬が著した論文です。（寺内徹乗・記す）

中略

芭蕉主義とは何か。それは一口に言って、仏教哲学の最高体たる「空」観念を本体とする世界観である。相馬御風は、芭蕉の心境を表現するものは、「諸行無常、寂滅為楽」の釈迦の偈につきると言っている。

「空」もしくは「寂滅」とは何であらうか。それは、自然の法則の最高にして最奥なる、絶対的実在であると仏教哲学は哲学する。だが不幸にも、「空」が自然界の本体であるといふことは、とりもなほさず、自然法則の抽象化が「空」であることを物語る。これは、本体と現象、神と世界の同一性である。時間と空間を超絶した絶対者が、時間的空間的形象をもつて、自己を顕現しなければならぬといふ痛ましい悲劇は、つひに世界原理としての自己否定である。

〔木村半文銭論―神秘主義世界観及び創作態度の批判―より抜粋。昭和九年三月一日『川柳人』一五七号）

川柳が低級下劣な詩をしかもってゐないのは、きたない通俗の長屋に住んでゐるためである――だから川柳を高い詩にまで発展させるためには、どうしてもこの通俗根性を引っこ抜いてしまはねばならない――このやうな主張のもとに、川柳を反通俗的な方向におしすすめたのである。結果として、非常に観念的な哲学的思索や感情を主題とした、いわゆる神秘川柳が作り上げられたのであった。たとへば田中五呂八などに代表された、カント的、シヨペンハウエルの、ベルグソンの、西田幾多郎の哲学のカクテルに酔っぱらった生命主義川柳、また木村半文銭などによって特徴的であつた東洋的犬儒主義を憧憬する鬼貫的、芭蕉的、神秘主義川柳等がそれ

である。〔俳句性と川柳性〕より抜粋。昭和十一年六月十五日『蒼空』第七号）

鶴彬は、社会、国家、戦争というものをどのようにとらえていたか。鶴彬は、観念論としてではなく、経済的視点で見えています。すなわち、行き過ぎた資本主義（自由競争）は格差を拡大させ、多くの貧困労働者を生みます。国家は自国の利益追求のため海外へ進出します。そのため国家は軍備を拡大させねばならず、国民にますます負担を強いることとなります。ついに暴走する国家は、個人主義（自由主義）を失わせていきます。これは戦前の話ではなく、現在、未来にも当てはまるものではないでしょうか。

次の論文では、明治の自由民権運動（日清、日露戦争の時代の中で、ロマン主義の短歌からリアリズムの短歌を詠むに至った石川啄木に、大正デモクラシー（第二次世界大戦の時代に生きた、リアリズムの川柳を詠むに至った自分自身を重ねているとも解釈できます。以下、鶴彬の論文で、啄木の短歌から始まります。（寺内徹乗・記す）

枯花に冬日てるごとわが歌にほい添ふとか恋燃えてくる
しら薨を胸に羅馬の春の森上つ代ぶりのわが妻わかし（明治三十七年三月『明星』まどろめば球のやうなる句はあまた胸に蓄みぬみ手を枕に

(明治三十八年七月『明星』)

然しながらこうした啄木の甘美な空想や幻夢の歌は、つひに破られるときがきた。即ち二十歳の時：郷里に帰るといふ事と(註・上京、病を得て——鶴)結婚といふ事件と共に、何の財産なき一家の糊口の責任といふものが一時に私の上に落ちて来た。「食ふべき詩」といふ痛々しい生活の現実が、啄木の浪漫主義感情をむざんにもずたずたにした。

「思想と文学との両分野に跨って起った著名な新しい運動の声は、食を求めて北へ北へと走っていく私の耳にも響かすにはあなかつた」(同上)

『食うべき詩』とは：謂う心は、両足を地面に喰つ付けてゐて歌ふ詩といふ事である。実人生と何等の間隔なき心持を以て歌ふ詩といふ事である。(同上)

かうした啄木の現実への敏感なめざめは、一つには啄木の貧しい生活に根ざしてゐたのでもあるが、更にもう一つこれと關聯して重要なことはこの国のブルジョア社会が、日清、日露の二戦役を経て成熟した結果、国際資本主義の隊伍の中に加り、国際的にも国内的にも漸く矛盾をさらけ出してきたといふ事情に基づいてゐる。即ち国際的には、市場獲得拡大のための、植民地経営とその××的確保、国内的には、資本の蓄積、商品の拡大生産、資本の投下、軍備の拡張、そのために起る増税、公債増発、更に一方それに照応する資本と労働の対立分化の激成、一般人民大衆の貧窮化等これらの社会的現実の動向や動揺の嵐は、かつてのブルジョア勃興期における自由競争的個人主義の希望や幻想を地上へ叩き落とす同時に、従って文学における浪漫主

義からはその華々しい美しい夢幻を奪ひ去り、ここに漸くかかるブルジョアの現実の矛盾を体感せる自然主義レアリズムが新しく抬頭した。それは石川啄木の作品を次の如きものにまで、変貌せしめてしまったのである。

いと暗き

穴に心を吸われゆくごとく思ひて
つかれて眠る

こころよく

我に働く仕事あれ
それを仕遂げて死なむと思ふ

友よさは

乞食の卑しさ厭ふなかれ
飢ゑたる時は我も爾りき

はたらけど

はたらけど猶わが生活楽にならざり
ぢつと手を見る

ここにうたはれてゐるものは、「両足を地面に喰つつけて」ゐるところの「実人生と何らの間隔なき気持」である。そこにはきはめて現実的な人間の生活心理・感情・思想が、あまりにも素朴率直に投げ出されてゐる。生きた人間啄木の血が脈々として流れてゐる。この啄木の血の奔流こそ、当時の社会的・日常的現実に対する敏感忠実な凝視からほとぼしるものであり、従って当時の生活の真実を代表するものといふことができるであらう。(井上剣花坊と石川啄木(二)より抜粋。昭和十二年四月五日発行『川柳北斗』四月号第二巻四号)

鶴彬の絵本でぶつかった壁

鶴彬を顕彰する会 寺内 徹乗

鶴彬の生涯を絵本にするという企画が持ち上がったのは、平成27年末の鶴彬を顕彰する会の幹事会である。幹事の一人が朗読劇(福島原発避難民の話)を見て良かったと言ひ、「鶴彬の朗読劇を企画したらどうか」と提案した。幹事の細川律子さんが「絵本のほうが良いのでは」と提案。岩手県出身の細川さんは、ボランティアで地元かほく市の子どもたちに宮沢賢治などの童話や絵本の読み聞かせをされている。

絵本は朗読劇よりハードルは上がる。文だけでなく絵も必要となるからだ。静まりかえる定例会の空気の中で、私は「します」と手を上げた。私は絵本を聞いた経験はないが、わが子に絵本を読み聞かせているうちに、絵本は文と絵をくつつければ、簡単に出来るんじゃないかと思うようになっていたからだ。私は保育園児のころから絵を描くのが好きだった。周囲から絵だけは褒められ、将来画家になろうと思っていた。だが中学校に美術部はなく、仕方なくやっていた運動部や勉強で忙しく、絵を描く余裕はなくなっていた。童心に帰り絵を再開したのは駒澤大学(仏教学)に入学してからだ。課外の美術部で油絵を始め、他学部の学生や他大学の美術部員と合同美術展などをして刺激し合った。大卒後、かほく市に石川県立看護大学ができた縁で入学した(第一期)。部活がない大学で私はアートサークルを立ち上げ、仲間と美術展をした。以上が私の簡単な画歴である。看護師となつてから絵を描かなくなった。

鶴彬の魂と私の縁

鶴彬を顕彰する会 岩原 茂明

十年以上のブランクを経て、今回、絵を描くことになった。とりあえず文は出来た。鶴彬という人物だけでなく、歴史的、経済的、社会的背景を書き込んだ。しかし、絵をどう描いてよいか分からない。見えるものを写実的に描くことは出来る。だが、漠然と頭に浮かんだイメージを、具体的な形にして描くという作業は、予想以上の難事業だった。戦前の写真も参考にした。しかしその模写は、人物を並べただけの陳腐な絵となる。人物の表情やポーズから、喜怒哀楽を表現しなければならぬ。感情描写には背景が重要となる。そもそも私は、人物画が苦手なのだ。ぐずぐず言っている私に「まだ出来てないの？」と妻が背中を押す。鶴が母と別れる場面、大阪に出て衝撃を受ける場面、日本中が戦争に巻き立つ場面。筆が止まった。下書きが出来れば、着色は一枚2時間かからない。その下書きの完成までに何時間かかった。完成した絵をわが子に見せると「お父さん、じょうず」と喜んだ。これが創作の励みだった。

鶴彬の生涯は暗い。細川律子さんには、文を短く簡単に、絵を明るくするようにと助言を頂いていた。私も同じ思いで、色彩を最大限に明るくした。だが文は少し難しくなってしまうた。

先日、恩師の川島和代先生（看護大教授・看護学）にお会いした。何年も前、川端精二さんが「鶴彬の絵本を看護大生に書いてもらえませんか」と先生に頼んでいたそう。私は川端さんにお会いしたことはないが、今の鶴彬を顕彰する会ができる前、熱心に活動をされていたと城戸寿子さんからうかがっている。偶然、看護大OBが鶴彬の絵本を描いた。不思議な運命を感じる。

14歳のとき、2月に中学校で立志式があった。すると母は「ああ、烏帽子（よぼし）せんなんねえ」といった。

何かわからなかったが、しばらくして父親から「田村テントの社長によぼし親を頼んだが、大叔母は、せっかくだから、殿様に頼めばいい」といっている、お前大叔母の家について、話聞いてこい」ということだった。

市内電車に乗って大叔母の家に行った。私の一家が小学校入学前に暮らしていたところでもある。大叔母は家柄がどうかいろいろあったが、私は「父が会社の社長に頼んだんだからそうします」といって帰宅した。ほどなく土か日曜日か社長宅でよぼしを行った。あらかじめ洗濯した制服姿で玄関に入ると、羽織姿の奥さんに、いつも通される茶の間ではなく、仏間に通された。

上座で座布団を勧められてまつことしばし、社長はタキシードを召してきて、一礼するなり私の後ろに回り、それを被せてくれた。「すまんが、町中の貸衣装や探したが、烏帽子がない、代わりに俺の魂を被せる。だから以後、田村の姓を名乗られよ。田村茂明だ」といった。

私はおどろいてしまったが、あらかじめ父親から「どんなことをいわれても、しきたりでそういうだけだから心配するな」といわれていたもので、「ああ、このことか」と心細いが納得した。ただ、元服のときに頂戴するのは下の名だと思っていたので、びっくりした

だけだ。式が終わって、隣室に移ったら父が控えていて、そこで岩原家の紋入りのふくさをもらったので一安心した。

社長から「何かわからんことがあったら、ここにはおらんけど鶴見君が事務局なんで聞いてみてくれ」ということだった。高松の方である。

そこで後日、鶴見さんが我が家に見えた折りに聞いてみた。「ふつうは下の名でないが」と。

「いや、鶴彬とか鶴見が烏帽子親のときはそうしている」ということだった。これが私にとつて、鶴彬という名を耳にしたはじめである。

そして5年後、大学に入学した私に烏帽子親から過分な祝いが届いた。のみならず、成人式を過ぎたら、奥さんが縁談をもってきたのである。

「まだ学生だから」といっても「学生結婚の人もいますでしょう？」と。「いや、実は警察に追われていまして」「鶴彬だって警察に追われていたけど、間違ってたかったと鶴見さんに聞いたよ」「いや実は心に決めてる人がいますよ」「それなら仕方はないわね。でも私の顔を立って会っただけあって」ということでお会いしたのだが、件（くだん）の娘さんからは「私に恥をかかせた」とずいぶん恨まれたのである。

原稿募集〜教育勅語・奉安殿について

森友学園の問題に関連して、教育勅語が注目を浴びました。そこで戦前教育を受けた方に、教育勅語や奉安殿にまつわる思い出や、戦後教育の激変などのエピソードをお寄せください。

連載・創作物語

鶴彬っ子たち

岩原 茂明

第二話

高川里香が黒川海人に訊ねた。

「そう、なら『暁を抱いて闇にゐる蕾』って句、素敵だけど、いったい何の花やろ？」

ドキッとした顔になった。

「ええっ、それはおれにはちよつと」といって頭をかいて大人のほうを振り向いている。

おじさんたちも「ええ！」といって、中にはにや笑ってる人もいた。

(なんだ、まじめに聞いているのに！)

「わからないの？」つい口が鋭くなった。

「ミシンを踏んでいるおばさんに海人は声をかけた。

「城戸さん、何の花かわかるけ？」

城戸さんといわれたおばさんは

「ええっ。はあ何の花かいの、お嬢ちゃん…。

そやけどこの句の蕾というのは、何かのたとえやと思うぞ、おばさんは」

と城戸さんはいってから

「まあ、こつちに座るまつし」椅子を勧めて、テーブルの上のペットボトルから茶碗のお茶を注いだ。

里香は海人と並んでお茶をいただきながら、大人の人たちと話をした。

「あなた、どこから来たんけ」大山さんが聞いてきた。

「金沢から、でも、でも四年途中まで高松小

学校でした」

(ああ、そうか) という顔が浮かんできた。

「なら見たことあると思うけど、砂丘で一番多い木はなにや」大山さんの質問は続く。

「アカシアです。南町の歴史公園とか」

うんうんとうなずいている。

「そうや、そやけど鶴彬が生きていたころは、アカシアの木はなかった。松がほとんどやった」

「ええ！、どのころから…」

大山さんは腕を組んで城戸さんのほうを見た。

「こちらの城戸寿子さんは昭和十三年生まれで、鶴彬の姪やから、きっと考えがあると思いうげぞ」という。

(えっ、鶴彬のおうちの方！)

急に城戸さんが頼もしく見えてきた。

「そう、花のつく木はなかったがや。やからこれは実際に見た光景というより、鶴彬が思い浮かべて記したんやね」

「なんでですか」

海人が割り込んで聞いてきた。

大山さんがこんどは答えてくれた。

「そのころ世の中がおかしなことになっていって、だんだん闇のようになっていったんや。海岸の松の木の根からは樹液を取って、ガソリンの代わりにしようとか」

「えっ松の木からガソリンとれるんですか？」海人は驚いた。

「そりゃ、採れるといっても、本物のかわりにはならん」

大山さんは立ち上がったつつかつと歩きだ

し、柵から特攻隊の資料をもってきた。

「ええ、そんな時代があったのですか」

里香は心から驚いてしまった。

「それで、松の木はみんな枯れてしもうた。そこに戦後アカシアの苗を町民総出で植えたんや」

城戸さんは小さな声で「おかしな時代やろ！」とささやいた。

「話すことも、書くことも検閲というて国の許しがないとできないようになって」

「おかしな時代？」

里香もそうつぶやいたが、どういふことだろう。まだよくわからない。

海人が、里香のほうを向いて

「うちのママもそういってるよ」といった。

「今もおかしな時代や。それ以上に鶴彬がこの句を発表したのは、昭和十一年三月十五日のことやが…」

「それで…」

海人が何かいおうとしたのを、大山さんがさえぎった。

「そのすぐ前の二月二十六日には、陸軍がクーデター未遂を起こした」

「二二六事件ですか！」里香はすつとんきょうな声をあげた。

聞いたことがある。そのころは治安維持法という法律があったがやそうな。

「だから、そんな時期だから、本当のことがいえないで、たとえて表したんだ」

(ああ！ そうなんや！ ガーン) 今の日本ではクーデターなんて考えもつかない。

「ボクたち、何年生？」大山さんが訊ねた。みんなすぐに「中学二年生」と答えた。

「そうかあ、十二歳だと、あの頃ならもう志願兵だね。あの頃の学校の先生ならきつと勧めるよ。そんな時代だった」

海人は驚いてしまった。二年先のことは考えてみたこともない。

「そのころは今の高校に行くような感覚で予科練などに入っていたんだ」

海人は、自分が若鷲の制服を着たところを想像した。七つボタンの海軍服をきて、さつそうと戦闘機に乗るために、滑走路を駆け出す。遠くにりっちゃんたち女子が手を振って見守っている。(かっこいいなあ)

「鶴彬も予科練めざしたの」

大山さんに聞いてみた。

「ボクたち、戦闘機乗りといつてもなあ。かっこよく見えるけど、しよせんは戦闘口ポットと同じだよ」

(ロボットかあ)

「鶴彬は『暁を抱いて闇にゐる蕾』の句と一緒に『枯芝よ！団結をして春を待つ』という句を残している」

「歴史公園でさつき見ました」と里香がいった。

大山さんは続けて

「団結することが禁止されていた時代と今は違うのだ」

大山さんは、歴史公園の石碑の大きな写真を指さした。

(枯芝ねえ！)

里香は高松歴史公園の芝原を思い出した。そういわれてみたが、この句では綺麗な芝原が枯れているところしか想像できない。

ただ、春を待つというのとはなんとなくわかる。でも団結って何だろう。

「まあ、こんなところができたの」

階段のほうでママの声がした。ママたちと一緒に柏木未歩やのっぼで野球好きの山原透が、がやがやと上がってきた。

「りっちゃん！ 久しぶり」未歩の声だ。

「未歩久しぶり！ イエイ」立ち上がって、両手をタッチした。透も久しぶりだ。

テーブルを囲んで、大人はおとなどうし、子どもは子どもどうしで話しこみはじめた。

ママの笑顔を見たのも久しぶり。大人は三々五々立ち上がって、壁面のパネルや展示の資料などを見始めた。

まだイスに腰かけている子どもたちに、城戸さんが「はい」といってビスケットを配ってくれた。ほおぼりながら、最近のこと、以前の話を話し合った。

「りっちゃんがね、ほら四年生の夏休みものきに、みんなで前の浜辺で泳いで」未歩がい

う。

「そう、離岸流というのに流されてしまつて、ずいぶん沖までいって…」

里香は思い出した。

浜辺の近くで泳いでいたのが、どんどん流されるのだが、どうすることもできない。

泳ぎは得意だが、ずいぶん心細かった。

すると斜め横から男の子がふたり、猛スピードでクロールで泳いできた。

「だいじょうぶ！ りっちゃん」

声をかけてきたのは海人だった。

「もうひとこぎ、こちらに来たら浅いから」これは透だった。

「ありがとう、そっち行く」

里香はほんの二メートルだけど、一所懸命こいで泳いだ。ようやく、足が底についた。

「ありがとう！ もうだいじょうぶ」と嬉しそうに叫んだ。

「未歩がさ、真つ青な顔してこっちきてさ」

海人がほっとした顔をしていいはじめた。

「ありがとう…」

こんどは涙がぼろぼろ出てきた。

あれから四年が過ぎ、今は鶴彬資料室にみんないる。

「あつたわね、あのときはみんなありがとう」改めて、なんの見返りもないのに、里香のためにみんなが動いてくれたことを思い出した。

(そうだ！ あれが団結なんだ)

今通っている泉野台中学校にも、友達はい

る。だけど、学校が終わったら別々だ。

高松小学校にいたときは、違っていた。

朝から晩まで友達と一緒に、困ったときには助け合っていた。

「団結って、そうか。あれか」と里香が膝を叩いた。

「なになに、なになに」

未歩やママたちまでが、こちらを見た。

里香は立ち上がって叫んだ。

「ママ、そしてみんな、鶴彬の『枯芝よ団結をして春を待つ』という句の『団結』というのがわかりました。身も心も一緒になってがんばろうということですよ」

「うーん…」ママが何かいいたそうだが、かわらず続けた。

「私は四年生のときに、ここのみんなにお世

話になりました。あれが団結です」

「うん！ そうよ」未歩が相槌を打ってくれた。「こんどみんなに何かあったら、こんどは私が助けます」

それだけ、一気に叫んで礼をした。

城戸さんが、立ち上がって拍手をしてくれた。すると大山さんやママたちも、そして子どもたちも立ち上がって拍手しだした。里香は「ありがとう」とつぶやいた。

「鶴彬の川柳つて、割りとわかりやすいね」

海人が、椅子に腰かけながらいった。

でもそのとき「待って！」と未歩の声が聞こえた。

未歩がちょうど鶴彬資料室の隅にいて、壁にかかったガラス棚の拓本をながめていたときだった。

拓本は「胎内の動き知るころ骨がつき」という句だった。その句を見ていて鶴彬の川柳が割りとわかりやすいという海人の声に疑問を感じたのだ。

だから「こっち、来て！」

未歩は、テーブルのほうを眺めて叫んだ。すると三人の友達が立ってぞろぞろと斜め

後ろの拓本の前に来た。

海人が「あれ、これは何？」と叫んだ。

透も里香も海人が指さしているガラス棚を見た。「胎内の動き知るころ骨がつき」

と記され、高松・浄専寺とある。

「ほね！」透がいきなりすつとんきような声をあげて、里香の顔を見た。

里香はいきなり顔をじろりと見られて、真っ青になった。

「ええっ、ほね！ 骸骨の！」

未歩は、城戸さんたちのほうを見た。城戸さんはミシンに向かっていた。大山さんがまじめそうな顔をしてこちらを見ている。

「大山さん！ ほねってなんで？」と聞いたが、「浄専寺いってみて」と冷たい。

四人で顔を見合わせた。

「胎内の動き知るころ」って何だろう。

隣にあるのが「手と足をもいだ丸太にしてかへし」なのだ。

手と足をもいだ：もぐというからには、摘み取ってしまったのであるう。

透が「高松のお寺ならすぐ近くかもしれん、いってみよう」とピッチャー風に腕を大きく振り回しながら叫んだ。

「うん、そうしよう、行こう」海人がまず動き始めた。自然、未歩も里香もついていこうとした。

すると、城戸さんが近づいて「あんたらどこへ行くがけ？」と訊ねた。

「浄専寺探します」と未歩が叫んだ。

「浄専寺ならあれや、ここから見える」

城戸さんは反対側の窓のところにいき、斜め向かいの門柱を示した。

窓の外は晴れ間が見え、その下に立て看板が出ている。

目の前の商店街をミニバンが交差して走り去っていった。

「あら、こんな近いがけ」

未歩は思わず里香と目を合わせた。

城戸さんがママたちに目配せしていた。それを見ながら、ママたちに「行ってきまーす」といって、

三階から階段をかけおりた。

四人は、商店街の狭い通りを斜め向かいの門柱に七、八十歩向かった。

門柱の前まで歩くと玉砂利が敷いてあった。御坊様が本堂の前にいてほうきで落ち葉を掃いていた。

「住職だが、みんな友達かな？」四人を順に見渡した。

「ええ、『：ほねがつき』の句を調べようと思っ」

「坊様！」と里香は叫んだ。

「坊様、ちゃんといえたわ」

いままでだったら、誰かの陰に隠れていたところだ。

『胎内の動き知るころほねがつき』ってどんな意味ですか？」里香は思い切って叫んだ。

透が「私たち、鶴彬の勉強しているんです」と助太刀してくれた。

「なら、句碑はここだけど、本堂に椅子があるから、腰かけて話を聞いてください。時間はあるだろうか？」

住職はすたすた歩き始めた。

玉砂利がきゅきゅと鳴ったが、数歩歩いたら振り返って「さ！ さ！ どうぞ、こちらへ」といった。

みんなは顔を見合わせてから、後に続いた。玉砂利はきゅきゅきゅきゅと鳴りどおしだった。

本堂に入ったら、小さな椅子がずらりと並んでいた。

里香が驚いたのは壁という壁に掛けられた「平和」のメッセージの壁掛けだ。

その中に白い木の箱を持った方を先頭に歩む一行を映したスチール写真があった。

「ご住職が「ちよつと見ていて」といって、庫裏のほうに引つ込んだ。」

里香はその写真を指さして「この木の箱なんだろう」とみんなに聞いてみた。

海人が「これ、ひいおばあちゃんのおコツをいれた箱とおんなじや」といった。

透がいきなり、「ねえ！ コツの話はわかったけど、ほねはどうしたん？」と叫んだ。

「あら、みんなここにいたの？」

母さんたちが扉を開けて顔を覗かせた。海人のママはご住職にペコペコ頭を下げている。

「何？ コツ？ ほね？ なんの話かしら」ママたちがお互いに見合つてささやいた。

「うん！ そこが肝心なところで」

「ご住職が難しそうな顔をして、母さんたちに「今詳しい人を連れてきます」といって庫裏のほうに引つ込んだ。」

「ちようど、この人が訊ねてきましたな」といつて紹介されたおじさんは「第三機関銃中隊」と記された資料のコピーを見せてくれた。

「初めまして、鶴彬の句の真意を知ろうと思つてきました。ところでみなさん、これは南京戦の戦死者のリストなんです」

「鶴見」という方がそこに記されています

すると、母さんたちは「あら」といった。

「鶴見さんてこの辺に多いよね」

「しかも、滋の妻の名は文子といつて、鶴彬の妹さんと同じ名なんです」

「あら！ だったら親しかったのかも」

「私は鶴彬の鶴の字も、鶴見さんが烏帽子親

で、そこから貰つた字なのかも、と想像してます」とおじさんは答えた。

しかし、その話の続きのように、ご住職が、子どもたちに向かつて語り始めた。

「この句と一緒に発表された句を知つてるか」未歩が答えた。

「手と足をもいだ丸太にしてかへし」ですか。いつだったか、小学校の帰りに男の子たちがトンボの羽根をもいで丸太んぼうにしていたので、残酷だからやめてほしいと頼みました」

「そうか、これ君たち、羽根をもいで、そのあとどうしたね」ご住職は男子ふたりをじろりと眺めた。

海人と透は顔を見合わせた。

「未歩があんまりぎやーぎやーいので道端に棄てました」海人はやつとそれだけ答えた。

ご住職は少し顔を近づけ前かがみになつて。

「そしたら、どうなった」

「大きな黒ありが寄つてきて、ひん死でのたうつとんぼの回りをぐるぐる回りはじめて、そのうちに、小さいありも集まつて」だんだんうつつむきかげんになつてきた。

「うん」住職はうなずいて、皆に椅子に腰かけるように勧めた。

がしかし、誰も座らず立つたままだった。

「トンボがもうのたうつのをやめたら、みんないつせいに飛びついて、まだ生きているのに喰いつきました」海人がいたくないことを白状した。

「とんぼはどうしてた」ご住職の顔が大きい。

「暴れたけどじきに動かなくなつた。かわい

そうなることをした」透は海人の顔を見たが、海人は口をへの字に結んでしまった。

ご住職はようやく顔を上げた。

「南無阿弥陀仏：なら、戦地で手と足をもいで丸太にされた人はどうなっただろう？ 果たして無事に帰つてきたといえるのだろうか」

「戦争をした人の手と足をもいだんですか？」と未歩が聞いた。

（戦争！）里香はびつくりしてしまった。

「軍艦で亡くなった人は、水葬といつて、海に遺体を投げ込む。陸軍だつて、戦に負けたら、遺体なんか取りにいけない。その辺の小石を拾つて持ち帰つただけだ、胎内の動き

知るところコツがつき」とこの句は読むのだが、本当はコツは故郷には帰つてこないのだ」

ガーン！ 里香は、未歩を見た。未歩もくちびるをかんんでいる。海人と透は目を白黒させていた。

「里香！ 顔が真っ青だ」

透が上ずつた声を出した。

母さんが里香を抱きしめてくれた。母さんの心臓の音がドクドクと聞こえた。しばらくそのままじつとしていたら、やつと落ち着いた。

坊守さんがお茶を運んできた。

「さあ、みんな座つてください」といわれて、ようやく一同は椅子に座つた。

茶碗を頂いてひと口すすつてみたら、里香は喉がからからなのがわかつた。

「兵隊は、ロボットと一緒に、それも赤紙という召集令状一枚で徴兵されたんだよ」

（続く）

時代を見据えた鶴彬

宇部功氏、退職校長会で講演

私が川柳の道に入った訳は、学級経営上の問題を解決するためだった。出稼ぎの多い地区だったので父親がほとんど家にいなかった。そういう中でどう指導していったらいいのかという事が課題だった。その時出会ったのがIBCのラジオ川柳である。学級通信を通してこの川柳を使ったら、子供たちの思いや地域や家族の思いが伝わるのではないかと考えた。そこで、毎週通信を出してそこに子供たちの川柳を載せていった。私も作らないわけにはいかないので川柳作りを始めるようになった。これを十五年ほど続けた。松園に来てからはIBCの他に東北放送にも子供たちは投稿していた。だからほとんど毎日川柳を作っていた。このようなことがなければ、私は今の川柳に関わる自分にはなかったと思う。

さて、私が鶴彬に出会ったのは、松園に来てからである。その作品の一部を紹介したい。

「高梁の實りへ戦車と靴の鉾」

「屍のぬないニュース映画で勇ましい」

「萬歳とあげて行った手を大陸において来た」

「胎内の動き知るころ骨(こつ)がつき」

「ふるさと病ひと一しよに帰るとこ」

これらの川柳を使って授業するとき、私自身が鶴彬という人物がよく分からなかったので「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という句から入った。一般的には、当たり前前に川柳を勉強していれば三年ぐらいで誰もがこの作品に出会うのだが、私は松園に来るまであ

まり知らなかった。

まず黒板にこの句を書いて、子供には「家に帰っておじいちゃんやおばあちゃんと話して合ってきて」というところから始めた。授業ではいろんな質問がでたが、「丸太」「もいだ」が問題になった。鶴彬は石川県の出身であるので「もぐ」という方言の岩手県との違いについて石川県の先生に会って調べた。

岩手では「リングゴをもぐ」などと軽い感じで使うが、石川では「無理矢理もぎ取る」という意味で使われているということだった。授業の中で子供から戦争の事ではないかという話が出てきた。

「私のおじいちゃんもそう言っていた」

今、時代は戦争で進んでいった。私の時代は戦争を感じたのは、八幡宮のお祭りで白い服をきた傷痕軍人が弾くアコーデオンの音を聞いたときが初めてだったので、今の子供たちには理解不能な事ばかりではないかと考えている。私が今思うことは、特に八十歳以上の人は戦争体験者であるから、是非機会を見て若い人に戦争の話をして欲しいということである。

さて、川柳は五、七、五の句だが、一句に小説一冊分、エッセイ一冊分のドラマがなければ成り立たない。私は川柳の道に入ってから四十年近く経つが、この世界はとんでもない世界だと今でも思っている。

鶴彬という人の句は、ものすごい背景と物語を持っている。ここに挙げた句は昭和十二年に発表された句であるが、すぐさま特高警察に捕まり留置された。そしてそのまま留置場で病気になり昭和十三年九月十四日に死去

した。二十九歳だった。

「高梁の實りへ戦車と靴の鉾」からも分かるが、豊かな実りも踏みつぶしてしまった日本の戦争を、中国や朝鮮半島の人たちが憎む気持ちは、百年たっても消えないということである。このような句を発表したら特高警察に捕まることは分かっていたが、鶴彬がなぜ発表に至ったかは、岩手にも関係している。

当時、映画、絵画、文芸等すべてが言論統制され、自由が全くなかった中で、家族、知人、友人に迷惑が掛かることを重々知りながら、鶴彬はあえて発表しなければという思いになっていった。

彼は、子供の頃から石川啄木の短歌が大好きでほとんど暗記し誦んじていた。もし啄木がいなかったら、彼の人生も変わっていたかも知れないほど啄木に心酔していた。啄木が亡くなった時に生まれたのが鶴彬である。盛岡との関わりはこの啄木を通してであり、啄木を尊敬し兄のように慕っていたのである。当時の自分の川柳の先生よりも啄木の方が素晴らしいとさえ思っていた。それは、啄木の方が時代をしっかりと見据えているということが、彼の評価であった。

彼の思いの底流には、この時代を見据える心があったので、今自分がここで言わなかったら誰が言うのかという考え方が、これらの川柳を世に出したのではないかと見るべきである。今は理解されなくても、何十年か後には考えてくれる人も出てくるのではないかと期待も込めて、逮捕覚悟で発表したのである。このとき掲載した「川柳人」という本は、今でも発行されている。

盛岡との関わりは啄木だけではない。何と

お墓は盛岡の「光照寺」にある。当時兄が盛岡の馬場町で染め物屋をしており、弟・彬の骨を盛岡に持って来て特高の見守る中埋葬したのである。昭和五十一年に県の川柳人が全国から募金を募り松園寺に建立した「手と足をもいだ」の反戦句碑は、現在は光照寺に移築されている。石川出身の鶴彬の墓は盛岡に、兄のように思っていた啄木の墓は函館に、それぞれ故郷を離れて建っているのは不思議な事であり、考えさせられるものがある。

啄木の思いや、啄木とも関係のあったあの田中正造の取り上げた公害問題や、鶴彬のような反戦の思いはその後、時代を経て実を結んでいることを考えれば、私たちは時代をどう見るといえるかがすごく重要なことであると思っている。

（宇部功氏は岩手県の元校長、盛岡市在住。平成28年11月5日、盛岡市で講演「岩手県公立学校退職校長会 盛岡会だより」から転載）

鶴彬川柳教室に学ぶ

岩手県葛巻町・小屋瀬小学校

●物語が伝わるような川柳を

《5年 外山 秋翔》ぼくは、鶴彬の活躍について学びました。

鶴彬は、反戦への強い意志をたくさん川柳にして、世の中に広めたそうです。その時代は、戦争に反対するだけでつかまってしまいますが、鶴彬はそれを知っていながらも、その川柳を雑誌にのせて世の中に広めたそうです。その後、特別高等警察に、つかまって

しまい、ろうやで病気にかかってしまい、亡くなってしまうたそうです。

その鶴彬は、石川啄木と、自分の人生をかけて、公害問題などに取り組んだが田中正造と関わりがあるということが、とても心に残りました。そして、鶴彬の骨が、盛岡のお寺にあったということにもおどろきました。

だから、これからは、単純に書くのではなく、一つの物語が伝わるような川柳を作りたいです。それに、鶴彬と啄木の関係について調べて、そのことについても、川柳にしてみたいです。

●最後まで意志を貫いた鶴彬

《5年 鉾谷 理菜》私が鶴彬から学んだことは、最後まで自分の意志を通すことです。私は人に何かを言われると、自分の考えを変えてしまいます。しかも、昔は特高警察



宇部功先生を囲む小屋瀬小と吉ヶ沢小の5、6年生

がいたので私はいやでも戦争に賛成しています。それも、鶴彬は最後まで意志を伝えました。そこがすごいと思います。

鶴彬から学んだことはもう一つあります。もう一つは、川柳の内容です。授業で先生が「一つの川柳に一つの映画分の話がある」と言っていました。改めて川柳を読んでみると、どれも深い意味がありました。ですが、「胎内の動き知るころ骨がつき」などの悲しい川柳もありました。意味を知ると、鶴彬のことに詳しくなれたと思います。

鶴彬のことをもっと調べてたくさんことを学びたいです。

●悲惨な戦争、2度と起こさぬよう

《6年 千葉 聡太》鶴彬の人生から学んだことは、是が非でも自分の考えを突き通すことも時には大事だということです。ぼくはつき通す方だと思っていますが、あそこまで危険な状態ではできません。特高なんておどろおどろしい所には生涯つかまりたくありませんが、やはり戦争とはこわいものだと思います。現代は、言論の自由が保障され、政府に反対しても身の危険にさらされることはありません。だからこそ周りの意見に流されない強い意志を持って行動したいです。

鶴彬の川柳の「手と足をもいだ丸太にかへし」や、「胎内の動き知るころ骨がつき」など、とても生々しいものは戦争を体験したことがない僕にはさすがにここまでむごたらしくはないんじゃないかと思いますが、実際に戦争に生きた人にとってはこれ所じゃ済まないのかもしれないと思いました。

こんなに悲惨な戦争を二度と起こさないために、これから生きていく僕たちは、努力していきたいと思えます。

●様々な思いこもった反戦川柳

《6年 元村 心》私は、鶴彬の人生について学習した。

鶴彬は本当に反戦への強い意志があつたんだなあと思った。鶴彬は、中学生の時に、新聞でデビューするということで昔から俳句や短歌を作ることができ、すごいと思った。そして反戦川柳では、つかまってしまおうと分かっていても、戦争はダメと言いはり、「手と足をもいだ丸太にしてかへし」などを、出版した。私は、この反戦川柳を読んで様々な思いがこめられているなあと思った。きつとこの川柳にあるような悲しいでき事を無くしたい、もう二度とこのようなことにならないでほしいと思ひこの川柳をだしたと思う。

そして、今、鶴彬の川柳は残り、戦争の悲惨な状況を物語っている。そして、意見が言えなかった人もきつと彼のおかげで伝えることができただろう。私も彼のように、周りの意見にうながされず、自分の意見を言える人になりたい。

●つかまると分かっていて反戦

《6年 村井 萌華》私は、この学習で戦争の苦しさ、こわさを改めて感じました。鶴彬の作った川柳を見て一番「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という川柳が心に残りました。理由は、昔は、戦争でけがをしたら、手や足を無理やりとって丸太状態にする意味だからです。すつごく痛いし、痛みをこした後も手足はなく、仕事もできず、自由にも動けないので大変だと思ひます。鶴彬は、戦争に反対するとかまってしまふのに戦争の苦しき、こわさを伝えようと戦争に反対する川

柳を出したことがすごいと思ひました。もし、私とその立場だったら、いやでも賛成していると思うので鶴彬の意志はすつごく強かつたんだと思ひました。

この学習を通して、やっぱり戦争はしたくないと感じました。まだ戦争をしている国もあるのです、世界が平和になってほしいです。

●鶴彬は日本を変えた一人だ

《6年 田野 宇浩》鶴彬のどんな地獄にあつても国に戦争をやめさせようと川柳を通して国にうつつたえた反戦へのとても強い意志がすごいとぼくは思ひました。

ぼくが、心に残つた川柳は、「暁を抱いて闇にいる蕾」と「手と足をもいだ丸太にしてかへし」です。理由はまず「手と足をもいだ丸太にしてかへし」で、銃でうたれさらに手や足の自由まで取られてしまふそのむごさがものすつごく伝わってくるからです。「暁を抱いて闇にいる蕾」は、ぼくたちがすこしでも日本を正しい方向に導かなければならないんだと彬が思つていたと思うからです。

やっぱり、鶴彬は、日本の歴史にえいきょうをあたえたといつても過言ではないと思ひました。それに「鶴彬は日本を変えた一人だな」とつづくづき思ひました。

●反戦の川柳、世界に広めたい

《6年 千葉 美珠樹》私は、戦争の本を最近読んだ。その本でも、戦争の悲惨さを絵や文で伝えていた。鶴彬の川柳は、少ない字数で絵もないのに、その当時の様子をよく伝えていた。鶴彬は、この川柳を出すと、特高につかまると知つていたのに、反戦の川柳を

出したのは、反戦への強い意志があつたのだと思つた。去年も、反戦の川柳を読んだ。一つ一つの作品にたくさん思いが入つて、鶴彬本人は、この川柳を作つていた時に、「どういう気持ちで作つていたのだろう」と思つた。鶴彬は、石川啄木の短歌がきつかけで川柳を作つて、石川啄木は鶴彬にとつてとても大事な人物だと思つた。このたくさんさんの反戦の川柳で、鶴彬の戦争への思いや、戦争はいけないものだということ、日本だけではない、世界にも広めれば、これから戦争の無い世界を作るのにつながるのではないかと思つた。

一じどものころ五・七・五

平成28年度年間賞 (岩手県)

宇部 功 選

名前はね愛情深い意味がある 寺田小6年 遠藤 一花

桜の木色づくころに君の恋 玉山小6年 堀江 聖羅

ありがとう心に咲いた花畑 玉山小4年 柳澤あやの

やさしさはえがおになれるおまじない 城北小1年 まえかわこのか

すすもうよドアのむこうにゆめがある 城北小2年 関村れもん

ひさい地はつなみの青をきらつてる 城北小3年 いしぎわゆうま

宿題なし心の中はカーニバル 城北小4年 山本 愛

戦争のきずあと残る海の底
 城北小5年 津嶋 梨瑚
 七十年実る平和はまだ未熟
 城北小6年 磯部 旺人
 さくらさくうすべにいろの春の庭
 涌津小4年 小野寺かのん
 青い空地球全体広がって
 野田小5年 中野 琳
 ロボットに無駄な日はない前進だ
 柳沢小6年 川村波流斗
 あたたかい家族と歩く花の道
 柳沢小5年 南 雪乃
 いじめをしもう変わらない黒になる
 河北小5年 石山 桃風
 友だちになれば心もまつりだよ
 好摩小4年 村田 実優
 人生は自分の色で染まってく
 小屋瀬小6年 元村 心
 あかぎれの母をなやます洗い物
 小屋瀬小6年 千葉美珠樹
 深い息吸って試験の結果待つ
 金ヶ崎小4年 佐藤友紀恵
 漬物は時がゆっくり作り出す
 山根小5年 小沼 玖慧
 おんだんか未来を黒でそめている
 花巻小3年 内とうまさ美
 色ちがうだが仲良くと笑う花
 生出小3年 山崎 碧斗
 ゆっくりとけれど全力かたつむり
 生出小6年 西村 一路
 積み重ねそれは自分の道しるべ
 水分小5年 野村ふく葉
 すごいなあ牛のしっぽがはえたたく
 吉ヶ沢小3年 芳田 悠華

父と母あいのふかさはかなわない

山形小3年 木地谷凜香

思春期は公転せずに自転する

宮古高校2年 佐藤 光

宇部先生特別授業の感想文④

(アイウエオ順)

かほく市立高松小学校6年

●鶴彬を気にしながら生きたい

《二津 瑠夏》私は、鶴彬さんの名前を聞いたことがあったような、なかったような感じだったけど、石川県河北郡高松町に生まれていたことを知ってとてもびっくりしました。

鶴彬さんの川柳が自分が住んでいる家のすぐ近くの高松歴史公園にあったなんて、まったく知りませんでした。でも、二十九さいで死去したのが、まだわかくて、これからやれることもたくさんあったと思うので、かわいそうだと思います。

言論の自由がない時代に、強く戦争に反対していたのが、川柳から分かりました。戦争に反対できない時代に戦争に反対していた、鶴彬さんは、すごい強い気持ちがあったんだなと思います。

特別授業をして、鶴彬さんについてくわしく知ることができて、とてもよかったです。私には、これからは、鶴彬さんのことも、気にしながら生きていきたいです。

●17字で思いをおさめ、すごい川柳

《二津 心咲》私は、鶴彬さんの川柳が、

すごいと思いました。何百字で書くようなことを十七字におさめている所です。私は、せめて三十文字程度ならできるけど、約半分ほどの文字数でまとめることができ、中身も、伝えたいことだけにしぼってよんでいる所もすごいと思いました。

「手と足をもいだ丸太にしてかへし」というせりゆは、戦争についての鶴彬さんが思ったことをまとめているので、すごいと思いました。戦争で苦しんでいる人たちの気持ちが伝わってきていると思いました。他にもたくさん川柳をよんできているけど、全部すごい作品になっていくのかなと思います。川柳には、意味がしっかり、ふくまれていて、俳句みたいだと思っけど、少し違う部分もあっておもしろいと思いました。今でも、残っている作品ばかりで、愛され続けられているのかなと思います。そこまじい作品を出し続けてきていて、すごいと思いました。私は、よく意味が分からないものばかりで、むずかしかったけど、意味を知ると、しっかり意味がたまっていて、すごいと思いました。

●ティッシュ入れ、一生の宝ものに

《二津 美幸》6月28日に鶴彬さんの特別授業をした。彬さんは戦争についての「川柳」を、何個も書いていたことが分かった。鶴彬さんは、一九〇九年の一月一日(正月)石川県河北郡高松町に生まれた。八才のときに父を亡くし、母もまた東京にうつり再入院した。そして、一九三八年(昭和十三年)入院し、二十九才という若さで死んだ。ななつの彬さんの一生を見てものすごいショックをうけた。

彬さんの川柳をいろいろ聞いたが、中では「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という川柳が一番心に残った。代表的作品だそう。最後にもらったティッシュカバーを選んだときにこの川柳がのっている物を選んだ。一生の宝ものにしたかと思つた。これからは川柳についてもっと知りたいと思つた。

彬さんの本名は「喜多一二」と言うことも分かつた。

そして一二さんにかかわつた人物がいる。田中正造さんと石川啄木さんだ。啄木さんは子どものころ、新聞の配たつてバイトをし、もらったお金を正造さんにわたし、日本のために使つたそう。これからは鶴彬さん（喜多一二さん）についてと、作つた川柳、そして川柳についてを考えていきたいと思つた。

●母への思いをつづつた鶴彬の四句

《二津 百花》私は、鶴彬さんの話を聞いて分かつたことは、一九〇九年（明治四十二）一月一日石川県河北郡高松町にうまれる。一九二六年（大正十五・昭和元）五月「氷原」にも登場、職を求めて大阪へ出るということが分かりました。

与謝野晶子さんは、戦場の弟を思う詩を発表して、戦争に反対する気持ちを表しています。鶴彬さんも「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という川柳を読んでいます。

鶴彬さんは、母への思いをつづつた四句を作句して「皺に宿る淋しい影よ母よ」、「飯粒をいただいて拾うわが母」、「母の影に連れ子はさびしそう」、「可憐なる母は私を生みました」という四つの作句で気持ちを伝えようとしていることが分かりました。

●未来を考えていた正造、啄木、鶴彬

《本多 真紘》ぼくは、鶴彬さんと名前を聞いてだれかなと思つた。おたよりを見たとき戦争反対ということについてとつても考えていたことが分かりました。ぼくだって反対だと思つた。人を殺して勝つたらよろこぶのは、とつてもざんこくだと思つた。そして、鶴彬さんは、戦争反対について「手と足をもいだ丸太にしてかへし」を聞くときもささいなことでなと思つた。それほど鶴彬さんは、戦争をやめてほしかつたんだと思つた。ほかの人の田中正造さんや石川啄木さんも戦争反対について考えていたことが分かりました。鶴彬さんは石川啄木さんを兄のようにそんけいしていたことが分かりました。田中正造、石川啄木、鶴彬さんたちは、これから未来をどういするかを考えていたことが分かりました。こうして一つのことについてしようけんめい力を出してがんばつていて、だれがなんと言おうとがんばつていてすごいです。ぼくもこれから、がんばりたいと思つた。

●けいさつにつかまっても、あきらめず

《三井 笙太郎》ぼくは、鶴彬さんのことがあまりわからなかつたけど、鶴彬さんは死ぬまで、戦争のことを反対しつづけてそれを十七文字でまとめてかいてることがわかりました。戦争への反対を勇氣をもつてかいてるのでそうとう勇氣があつたなと思つた。けいさつにもつかまつて、それでもあきらめないということが、かっこいいと思つた。ぼくは、ほんたひしようとしても、勇氣がないから、できません。「ちいちゃんの

かげおくり」など、ぼくたちにできないことができるのがすごいと思つた。こういうふうな戦争のはなしを、なんこもかいて、家族に反対されても、あきらめなかつたんだなと思つた。二十九才の若さでなくなるということに残念に思つた。この戦争の話聞いて、わからなかつたことなどよく分かりました。田中正造さんは全国の教科書に載つたのつていてということに、さうとう有名だつたんだと初めてわかりました。

●戦争反対の強い思い見習いたい

《宮崎 萌々奈》私は、今日はじめて鶴彬さんを知りました。こんなにもすごい人だとは知らず、前に保護者の方へおたよりがきたときも、内容は気になつたけど、すぐに他の事をやつたと思つてしまいました。私たちが住んでいる高松に生まれ育つた事がすごくびっくりし、高松にこんなすごい人がいたんだ！と思つた。鶴彬さんの書いた「手と足をもいだ丸太にしてかへし」というのをきいたとき、何のことだか分からずいたけど、戦争中に手や足をうたれ、そこを放つておいたらいみができ、命が危ないというときに、麻すいなどもかけずに手や足を切つたなど聞いたとき、背中がぞぞつとしました。昔はそういうことがあたり前で、戦争中は病院などいけない状態だったと聞いたので、今より全然ちがつてすごく大変で、私だったら絶対に無理だと思つた。

鶴彬さんは石川啄木さんという人を兄のように思つた。そして、石川啄木さんは田中正造さんと関係があります。この三人は貧しかったということが共通しています。でも、人に負けないくらい強い気持ち・思い

を持っていきます。私はこの三人のことを本当にすごいなと思います。この三人を見習って、自分自身の強い気持ち・思いを持って生きていきたいと思えました。鶴彬さんは、戦争に反対する強い思いをもっています。ろうやに入ろうと…さまさまな人々に何を言われようと…そんな、強い思いを持った鶴彬さんがすごいと思います。私も、鶴彬さんのようになりたいです。昔のような戦争は、もう二度と起きないように願います。みんながそう思っています。そのうちの一人が私。もう一人が鶴彬さんだと思います。これからも、戦争のことをよく考え平和に生きていきたいです。

●戦争をよんだ川柳と母をよんだ川柳

《森 陽女》鶴彬の本名は、喜多一二ということが分かった。鶴彬は、「手と足をもちだ丸太にしてかへし」という詩をつくった。「戦争」の川柳で、無理やり手と足を取るという意味だと分かった。鶴彬は、最後まで戦争は、やってはいけなしいったことが分かった。

鶴彬のいこつは光照寺の墓地にあったことが分かった。鶴彬は、石川啄木のことを一番そんけいしていたことが分かった。一九二五年、五月柳名喜多一児で「影像」でデビューしたことが分かった。

他にも、「皺に宿る淋しい影よ母よ」や「飯粒を戴いて拾うわが母」、「母の影に連れ子はさびしそう」、「可憐なる母は私を生みました」などたくさんの川柳を書いていたことが分かりました。

私は、鶴彬のことは知らなかったけど、鶴彬特別授業をして、戦争とはやってはいけな

いという気持ちがありました。鶴彬のことをもっと知りたいなと思いました。

●権力にたちむかったゆうぎ、すごい

《森 常大》ぼくは、こんなだいなことをした人が、高松出身ということにおどろきました。理由は、まず、権力に立ちむかつていくゆうぎがすごいなと思いました。この時は、戦争に反対する歌などがだめだったのに、かいて発表することがすごいです。ぼくだったらかきもしないと思います。それに、戦争は次々と人が死んで行ってしまいうし、この時は、もうすぐで産まれるといういわいをする前に、ほねがとどくというとてもかなしいじだいたんだなという事がわかりました。鶴彬は、こうなる事をわかっていて句を書いていたので、なおさらすごいと思いました。でも本当に、戦争でかかったようなところしか映画にしないと、そのころの日本がそうとうおかしいなと思いました。鶴彬は最後までつらぬきとおしたので、ほんとすごいなと思いました。

●川柳に命をかけた熱心さが心に残る

《山口 楓東》ぼくは、つる彬さん（喜多一二）のことを知らなかったから今日知れてよかったし、つる彬さんが何をしたかも知らなかったもので、とってもよかったです。だけど日本のことでしたら、戦争のことを書いていてしっかり伝わってききました。

なぜ岩手におはかがあるのか不思議だったけどお兄ちゃんの住んでいるところにおはかがたっていることがわかったのでなぜ岩手におはかをとったかということがわかったし、川柳に命をかけてやっている熱心さがいちばん心に

残っていると感じました。

でも警察につかまっていたのでそれだけのすごいことはとても勇気がいると思うし、ぼくは、そんな勇気はないからとってもすごいと思いました。

●鶴彬と同じ地域に住むほこり

《山口 結愛》私は、鶴彬はとっても勇気のあるすごい人だと思いました。なぜなら、『言論の自由』がない時代は戦争に反対する意見を言うと、警察に連れていかれる、ということを知っているのに、「手と足をもちだ丸太にしてかへし」など、戦争のことについて書かれている川柳を発表するのはとても勇気がある行動だと思いました。ふつうの人ならできないくらいの行動力だと思います。私は、鶴彬の話を聞いておどろいたことがあります。それは、本名が鶴彬ではないということです。ちなみに本名は喜多一二だそうです。次におどろいたのは、鶴彬の骨は、光照寺の墓地にあったということです。鶴彬は、石川啄木のことを兄のようにそんけいしていたということを初めて知ることができました。名前しか聞いたことのなかった鶴彬は、たくさんの人が知っている有名な人だったとは思っていませんでした。私は、鶴彬さんと同じ地域に住んでいるのでほこりに思えます。

●「29歳の死」その先に待っていた夢は…

《山本 菜咲》鶴彬さんが心に持っていたその強い思いは強く伝わってきました。いろいろな詩を読んでみると意味の分からない詩でした。「手と足をもちだ丸太にしてかへし」「胎内の動き知るころ骨がつき」など私達が読みにくい字だったり…。けれど話を聞

いていると「あー、そういうことかあ」って思ったり「なるほど」ってたくさん思いました。そんな詩の中に鶴彬さんの強い思いが強くこもっているように感じました。戦争は反対など…。

鶴彬さんは、一九三八年、九月一四日に死去となりました。それに、二九さいの若さで死となるのは、そうとう辛いと思います。ただ死にたくないと思っただけです。まだ、この先に待っていた夢や希望、そんな物をおきざりにして行くには、私は、辛いです。理由は、待っているものを見捨てるのは強い勇気が必要だと思うからです。

鶴彬さんという名前はペンネームで本名は喜多一二さんということが分かってよかったです。他にも石川啄木さんや田中正造さんなどいろいろな人がいることが分かったのでよかったです。

●鶴彬は高松小の先ばいだったんだ

《山本 菜々子》私は、鶴彬さんのことを全然知らなかったけれど、今日の特別授業で鶴彬さんは他の人がやらないことを勇気を出して行ったり、今でも受けつがれている、川柳をたくさんみだしていたことが分かりとてもびっくりしました。

そういう人がとても身近な場所にいたことが分かりました。

句碑が歴史公園にあるのは知っていたけれど何を書いてあるのか分からなかったので、分かってよかったです。

戦争があった時代に亡くなるまでずっと、戦争をやってはいけなと言っていたのはすごいと思っただけ、これからは戦争はしてはいけないとあらためて思いました。

鶴彬は高松小学校にもかよっていたということが分かって、鶴彬さんは、私たちの先ばいなんだなと思えました。今日の特別授業はとても勉強になりました。

(学年は昨年6月現在、高松小学校の部終わ)

大阪寝屋川から見学に

4月2日(水)10時、大阪府から新婦人の会寝屋川支部の9名がバスで高松を訪れました。一行は前日に金沢の東茶屋街など観光をしてきたということでした。

鶴彬巡りでは、まず歴史公園の「枯れ芝よ団結をして春を待つ」の句碑へ集合しまし



新婦人寝屋川支部の皆さん(歴史公園鶴彬句碑前)

た。「どうして歴史公園という名前なのですか？」という質問がありました。公園内にある「能登街道高松宿」と「口銭場」の記念碑のことや、この句碑が公園整備に合わせて移設された説明を受けて「鶴彬が歴史に受け入れられたということですね」という感想が聞かれました。

一行は高松中心部へと移動。宿場町の面影が残る町並みにも感動。生家跡では現在も喜多家(鶴彬の伯父であり養父母の子孫)が受け継いでいることに驚く人もいました。喜多家の前庭にある「可憐なる母は私を生み出した」の句碑の前では「これを16歳で作ったの？」という驚きの声や、戦前の日本の女性の境遇に思いをせ、「可憐の憐は、あわれみの憐でしょうか？」という声も聞かれました。

当時、喜多家の前では特高警察が見張っていたという説明を受け「鶴彬はどのような亡くなり方をしたのですか？」という質問もありました。東京にある留置所で栄養失調となり赤痢で亡くなったという説明を受け、同情する声が聞かれました。

生家近くの浄専寺の「胎内の動き知るころ骨がつき」の句碑を見てから、伽藍でお茶を一服。最後は鶴彬の資料室を見学し、帰途につきました。

1時間余りの駆け足でしたが、来訪した婦人の会の会員の中には大阪城の鶴彬句碑を訪ねたことのある方や、あかつき川柳会を知っている方もいました。「フェイスブックで拡散します」と言って下さった方もいました。

(寺内徹乗・記)

新たにシンポジウムと演劇決まる

第18回 鶴彬を顕彰する会総会

平成29年1月28日、まちかど交流館で鶴彬を顕彰する会の第18回総会があり、15名が参加しました。長谷久人会長のあいさつでは、当会に限らず文化活動は高齢化し、年々先細ってはいるが、若い人たちにも働きかけ、イデオロギーを超えて、さまざまな活動を通して鶴彬を広く知ってもらうことが必要であると訴えました。

続いて小山広助事務局長より、平成28年度の事業報告および会計報告、香林維子監査より会計監査報告がありました。

昨年度の主な事業

■川柳講座(全5回)

4月16日には福村今日志さん(県川柳協会会長)、5月14日には本田一三さん(県川柳協会副会長)、6月11日には講師・濱本耀子さん(県川柳協会副会長)、7月23日には講師・赤池加久さん(県川柳協会会計)、8月6日には岩佐ダン吉さん(あかつき川柳会幹事長・岸和田川柳会会長)に講義をして頂きました。川柳の基礎から実践まで幅広い視点から学べ、大変好評でした。(参加延べ人数 一八一名)

■宇部功先生・鶴彬の特別授業

前年度に引き続き、盛岡市から宇部功先生に来て頂き、6月28日、鶴彬の生まれたかほく市高松小学校、七塚小学校で「鶴彬に学ぶ未来の道」というテーマで特別授業がありました。夜は浄専寺で講演「子どもたちに語り

継ぐ 鶴彬―啄木―正造の志」がありました。

■第5回 高松歴史街道フェスタ

8月18〜26日、まちかど交流館で写真展・鶴彬の絵本原画展(前半生)。8月21日、中町会館で、かほく市川柳祭(第4回)の入選発表・表彰式(小学生二八六名、中学生一九五名、一般二六名投句)。増田康記さんのコンサート、額神社境内で万灯会があり、多くの人で賑わいました。

■第21回 鶴彬川柳大賞

これまで高松川柳会(かほく市川柳協会)が主催していた事業で、20回限りで中止という流れになりましたが、この伝統を絶やすのは惜しいとの声があり、平成28年度より鶴彬を顕彰する会が引き継ぐことになりました。全国から約二〇五名の投句者があり、鶴彬忌川柳大会(8月28日)で入選発表、表彰式が行われました。

■第18回 鶴彬をたたえる集い(碑前祭)

9月14日、歴史公園の鶴彬句碑前で行われ、南町会館でドキュメント番組「南京事件 兵士たちの遺言」を鑑賞しました。

■絵本「鶴彬の生涯」出版

12月16日〜26日、まちかど交流館で鶴彬の絵本の原画展(全生涯)を行い、平成29年3月に八〇〇部を出版しました。

その他の事業、行事

■映画「鶴彬〜こころの軌跡」スタッフ来訪

昨年3月25日、主演俳優・池上リョウマさん、監督補佐・神山謙三さん、助監督・関本(旧姓)真理子さん、編集・蛭田智子さんの4名が、8年ぶりに高松を来訪。映画製作に関わった地元ボランティアを中心に懇親会

をしました。

■鶴彬のリーフレットの作成

鶴彬資料室開設より2年、待望の鶴彬のリーフレット「鶴彬 生誕地を訪ねる」(無料)ができました。資料室に置かれた他、イベント会場にも置かれました。

■ホームページの充実

映画普及の目的で鶴彬のHPを開設しましたが、活動の幅が広くなり、鶴彬を顕彰する会のHPとして更新しました。また、鶴彬資料室のブログも併設しています。

■鶴彬資料室の見学者多数

県内外から15団体(10名以上)と個人での見学が多数ありました。

■パネル「鶴彬 波乱の生涯」展示

7月31日、石川ピース9フェスティバル(美川文化会館)、8月15日、12月8日、不戦の集い(石川県庁展望ロビー)、金沢駅もてなしドーム)、第62回日本母親大会(金沢市産業展示館)でパネル展示等で、鶴彬を宣伝しました。

■鶴彬通信「はばたき」

5月、8月、10月、1月の4回発行。川柳講座の講演要旨、宇部功先生の授業記録と子どもたちの感想文、活動報告などを記録しました。

◆訃報

平成28年2月26日、橋爪宏さん(柳名・無声子・鶴彬を顕彰する会副会長・かほく市川柳協会会長・高松川柳会会長など。84歳)。平成28年4月2日、加藤伸代さん(神山征二郎監督の妻、映画「鶴彬〜こころの軌跡」の脚本担当。57歳)ご冥福をお祈り申し上げます。

続いて遠田勝良事務局員より、平成29年度の事業計画(案)が提案され、決まりました。

継続事業

□第6回歴史街道フェスタ(第5回市民川柳祭)

8月20日(日)。額神社は改修工事のため使用できず、高松産業文化センターを会場に行う。市民川柳の受賞作の発表と表彰式。アトラクション。万灯会は行燈を中心に、会場周辺で行う。

□第22回鶴彬川柳大賞

9月3日(日) 鶴彬忌大会(高松産業文化センター大ホール)で入選句発表。

□第19回 鶴彬をたたえる集い(碑前祭)

9月14日(木) 高松歴史公園

新規事業

□シンポジウム「今、鶴彬から学ぶこと」

10月21日(土)2時~4時、石川県教育会館2階会議室。神山征二郎さん(東京)、佐藤

◆第5回市民川柳祭 川柳募集◆

【対象】かほく市民か同市に勤務している人

【課題】中学生「未来」、一般「時代」自由吟も可。一人2句まで。

【募集期間】6月1日(水)~7月10日(月)

住所、氏名(ペンネームは実名を別書)

【宛先】かほく市高松キ5 小山広助宛

最優秀句1。秀句3。佳句5。入選句10をかほく市川柳協会、鶴彬を顕彰する会幹事会で互選し、佳句までに賞状と副賞を授与。8月8日(日)のフェスタ・万灯会で展示します。

岳俊さん(岩手)、岩佐ダン吉さん(大阪)をゲストを招き、平野喜之さん(高松)の4名でパネルディスカッションを行う。司会は寺内徹乗(高松)。

□演劇「鶴彬―時代を越えて」(仮称)

平成30年9月の公演に向けて準備。金沢市市民芸術村ドラマ工房で開催(5回公演)。

その他の事業

□宇部功先生・鶴彬の特別授業

□鶴彬通信「はばたき」

5月、8月、11月、1月発行。

◆第22回 鶴彬川柳大賞 川柳募集◆

【対象】全国公募。

現代を風刺した新しい感覚の川柳、または平成28年の漢字「金」を詠みこんだ川柳。一人2句まで。未発表の作品に限る。

【募集期間】6月1日(木)~8月1日(火)

住所、氏名(ペンネームは実名を別書)

【投句料】一人につき千円(郵便定額為替)

【応募先】石川県かほく市宇野気二81番地

かほく市教育委員会生涯学習課内

第22回「鶴彬川柳大賞」公募係 宛

鶴彬大賞1。優秀賞3。佳句5。入選句若干を

4名の選者(福村今日志・伊東志乃・赤池加久・遠田亀公子)で互選します。9月3日(日) 鶴彬忌大会で入選句発表。

大賞には賞金1万円と副賞5千円相当のかほく市特産品。優秀賞には5千円相当の特産品。佳作には3千円相当の特産品。入選者にはそれぞれ記念品を贈呈。投句者全員に入選者の発表誌を送付します。

□鶴彬資料室の拡充

説明員の拡充や企画展示、物販など管理運営を改善していく。

□全国の鶴彬関連団体との交流

□ホームページ・ブログの充実

□パネルを活用し、各種イベントに参加

会員、機関誌購読者の拡大

□東京の鶴彬顕彰碑建立活動に協力

小山事務局長より平成29年度の予算案、角島広治事務局員より会則、役員の場合が提案され、満場一致で決まりました。

北口吉治副会長が閉会のあいさつ。治安維持法の被害者の調査をしたところ、石川県では宗教関係者が比較的多かったという報告がありました。また、鶴彬を普及するため民医連に所属する病院(医院)などにも働きかけ、鶴彬のパネルなどを置いてはどうかという提案がありました。

閉会后、懇親会がありました。(寺内徹乗・記)

会員募集 (随時受付)

年会費 2,000円(団体3,000円)

「鶴彬通信 はばたき」

購読料 1,000円/年(4回発行)

■発行 鶴彬を顕彰する会

■事務局 〒929-1215 石川県かほく市高松キ5 (小山 広助 気付)

■TEL・FAX 076-281-1201

■E-mail: turuakira@yahoo.co.jp

■ホームページ: http://tsuruakira.jp/